

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第100集

浪ノ上

I

2009年3月

豊橋市教育委員会

『浪ノ上』本文正誤表

頁	行	誤	正
3	右下	新期居状地	新期居状地
3	右下	下位面 (M)	下位面 (MII)
3	右下	上位面 (M)	上位面 (MI)
3	右下	海美類層	海美層
3	下	木村一郎	木村一朗
6	31	馬場寺	馬場寺山
11	23	野口剛氏は、	野口剛氏は、
12	17	石井茂夫	石井茂夫
12	22	段丘古墳	段丘古墳
31	2	浪ノ上遺跡発掘目録	浪ノ上遺跡発掘目録
31	13	木下克巳	木下克巳
37	1	3箇所	6箇所
45	26	浅緑	浅緑
49	24	22・23・24	22～25
60	3	堀	堀
62	2	李	李
62	5	穴山式土器	穴山式土器
63	24	篠東	篠東
63	26	弥生式土器	弥生式土器総括
63	26	出版株式会社	出版株式会社
63	30	埋蔵文化財調査用	埋蔵文化財調査用
63	33	豊橋公民館	豊橋公民館
63	34	第9巻	第9巻
73	28	を施した後に横位の平行線帯	(削除)
75	4	堀	堀
75	6	口縁に線をもち口縁部が	口縁部が折れて
75	23	堀の	堀か壁の
75	29	附台部	附台部
75	30	蓋の重心を下胴部におく造り	蓋の最大径を下胴部におく造り
75	31	底面に	底面に
77	8	長方形	ほぼ長方形
79	20	隅田長方形	ほぼ隅田方形
81	17	48・51	51・64
81	25	隅田方形	裾張り隅田方形
81	31	56～63	56～62
83	5	65	64
83	15	隅田方形	ほぼ隅田方形
87	31	96～98・100	96～100
87	33	波線文	波線文
87	34	波線文2条波線文帯2条	波線文、波線文帯
89	14	B-S K18	B-S K8
89	15	施されている、	施されている、
95	3	青山式土器	青山式土器
95	3	142～145	143・145
95	3	考えられるものでB-S B18	考えられる、B-S B18
95	4	考えられる、のこり	考えられるのこり
95	15	に記されている、	に赤彩が施されている、
97	21	中期中葉の下長山式土器	中期後葉の長床式土器
101	5	附台第34の14	附台第34の14
103	5	204～	205～
103	10	棒状文	棒状文
103	17	34所	3ヶ所
103	23	228	222
103	29	南極打法	西極打法
104	4	幾内地方	幾内地方
104	6	形式	形式
104	8	縄文時代小学校	縄文時代小学校
104	9	先史・古代遺跡	先史・古代遺跡
104	10	於御所遺跡	於御所遺跡第2次調査
104	13	1955	1959
104	16	14巻・・・1955	第3巻・・・1966
119	18	「口縁部には…ギザミを加え」	(削除)
119	21	蓋	蓋台
121	10	蓋3	蓋台9
121	10	S字溝17	受口状溝7
121	11	穴山式の要素	穴山式の新しい要素
121	12	第2様式すなわち穴山式土器	第3様式
121	12～13	141についてこの	141については穴山式の
121	25	16・17・19は堅穴・・・検出された	16・17・19は堅穴・・・検出された
121	32	断面に至る	断面に至る、
123	7	約4m	約14m
124	1	向直線的	向けて直線的
124	1	断面	断面
127	25	S字溝	受口溝
127	29	S字溝1と同時期の	(削除)
130	3	隅田方形である	隅田長方形に近い、
130	17	隅田方形である	ほぼ長方形である、
130	27	S字溝	受口溝
130	30	拡張して受口状	拡張して受口状
130	32	26は・・・腰らみみの	26は・・・腰らみみの
130	33	口縁は丸く仕上げられている、	(削除)
133	9	隅田方形である	ほぼ隅田方形に近い、

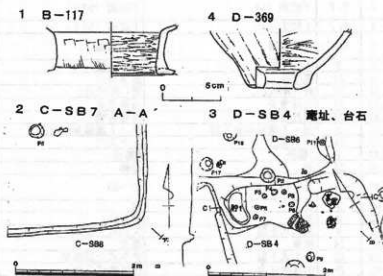
頁	行	誤	正
133	20	小形の鉢	小形の碗
133	20	丸味を持つ、下胴部がつく、鉢の	丸味をもつ。碗の
134	8	南円方	方形
137	3	口縁は丸く仕上げられている、	(削除)
137	6	49～51	48～51
137	32	穴山式土器	王江式土器
139	26	66・67	66・66
144	26	坪部と脚端	坪部を欠き、69は脚端
147	12	72～73	72～74
147	29	底部である	底の底である、
147	30	クシ状器具	貝殻の腹縁
147	31	76・・・79・・・	77・・・78・・・
149	35	底面に凹み	底面に凹み
150	14	出土遺物のうち87・88は王江式土器である、91～93は、	出土遺物のうち87・88は王江式土器である、91～93は、
151	13	くの字状口縁	くの字状口縁
151	15	による波線文を	波線文を
151	20	蓋の	蓋か壺蓋の
151	23	脚部と脚端・・・いる	脚部で、(脚端以下削除)
151	24	第3様式すなわち王江式土器	第3様式
161	11	壺立住屋跡	壺立住屋跡
163	31	2・5は・・・くの字状口縁	2はくの字状口縁、5はS字状口縁
163	34	坪部	脚部
165	7	P1	P1
167	7	壺趾の前面から	壺趾の前面から、368は東側から
167	17	波線帯	波線文帯
169	2	D-S B5、	D-S B5の1
169	5	壺台	壺台
169	6	鉢	碗
169	11	35・36	25・26
169	12	第3形式	第3形式
171	31	43の腰らみ部には・・・が通る	43の腰らみ部の下端にはクシ状器具による短く薄く横位の調整
171	33	坪部と脚端の上端	坪部と脚端の上端
173	1	付き・・・に差る	付く、
173	2	脚部をもち、・・・差る	脚部をもつ、
175	26	蓋の上端部	蓋の上端部
178	15	口縁は・・・いる、いずれも認められる、	(削除)
179	24	76～86	75～86
179	33	丸気味	丸味
182	4	丸味をもち、	平底で、
182	6	747	747
183	6	90・21	90・91
184	27	後の	他の
186	5	叩き直	ハケマ
186	6	腰らみのが	腰らみのが
186	31	158・160・167	(167を削除)
190	2	172・180・181・184	(172を削除)
190	2	D-S B2	D-S B20
191	1	28、壺立住屋跡	28、壺立住屋跡
193	26	全て土壌	全て土壌
195	7	外壁	内壁
195	10	外反し太くの字状	外反し太くの字状
195	17	223	(削除)
195	20	24.0	240
195	24	243～252、254～259	242～259
195	30	253	259
195	31	242	(削除)
195	33	腰らみ	腰らみ
196	7	242	(削除)
196	10	242・253～258	242・243・253～259
196	28	直線的に下り、	(削除)
199	25	羽状の文様	羽状の調整痕、屈折部の上側にギザミ
201	6	クシ文	クシ文
201	15	孔が設ける、	孔を設ける、
201	16	291	295
201	26	276	296
203	20	斜位の刺突文列	貝殻の腹縁を用いた斜位の刺突文列
203	25	同器具	貝殻の腹縁
203	26	231	331
203	29	330	339
203	30	340	342
204	1	346	(削除)
204	6	346	349～347
204	9	338～360	359～360
204	10	腰らみ	腰らみ
204	11	腰線帯	腰線
204	22	第2形式	第2形式
204	32	横線文帯間に羽状文	横線文帯間に貝殻の腹縁を用いた羽状文
204	35	399～393	399～393
205	1	腰らみ孔が設ける	腰らみ孔を設ける
205	2	391・392	(392を削除)
205	4		392は壺台である、

挿図正誤表

頁	位置	誤	正
64	左上	A-SB2	A-SZ1
74	左中央		アミメ3ヵ所「伊」を記載
76	右中央		アミメ1ヵ所「伊」を記載
109	右下	下の89	90に
111	右中	口縁部修正	右図の1 B-117
115	右中	191を	201に
126	右上	E-SK8	(削除)
128	左中	上のP3を	P8に
128	左中	下のP3を	P7に
129	右下	Aのトンボの位置	右図の2 C-SB7 A-A'
135	中央下	P7	(削除)
148	左上・中	C-SB20とC-SB21	(削除)
160	右上	D-SK25	(削除)
166	左中	P8の位置	右図の3 D-SB4 竈址
166	左中	台石	右図の3 D-SB4 台石
194	右中	「P12とB」	(削除)
198	右下	地名「3」と「3」	墓下層を「4」、地山を「5」に
198	右下	D-SK13の文字と重複	(削除)
198	キャブ シモン	D-SK16~D-SK22	D-SK16~D-SK21
224	右中	D-369図修正	右図の4 D-369

観察表正誤表

頁	挿図番号	(分類)	誤	(分類)	正
229	B-12	(備考)		(備考)	C-54と同一個体
230	B-50	(層位)		(層位)	床面
231	B-63	(備考)		(備考)	B-198と接合
231	B-66	(備考)	B-67と同一個体	(備考)	B-67と接合
231	B-67	(備考)	B-66と同一個体	(備考)	B-66と接合
233	B-137	(備考)		(備考)	B-139と同一個体
233	B-139	(備考)		(備考)	B-137と同一個体
234	B-168~ B-170	(層位)		(層位)	埋土
235	B-191	(備考)	ミニチュア、台付	(備考)	ミニチュア台付壺
235	B-196	(備考)	S字壺	(備考)	宇田型壺
235	B-198	(備考)	S字壺	(備考)	壺、B-63と接合
235	B-200	(備考)	ミニチュア、台付	(備考)	ミニチュア台付壺
235	B-204	(備考)		(備考)	須恵腹
236	B-226~ B-229	(層位)		(層位)	黒色有機土層
236	B-230	(層位)		(層位)	表探
236	B-231~ B-233	(層位)		(層位)	黒色有機土層
236	C-3	(部位)	へ下胴部	(部位)	上胴部
236	C-9	(器種)	壺	(器種)	樽台
237	B-212	(備考)	棒状文	(備考)	棒状浮文
237	B-214	(備考)	ミニチュア、壺	(備考)	ミニチュア壺
237	C-1	(備考)		(備考)	C-2と同一個体
237	C-2	(備考)		(備考)	C-1と同一個体
237	C-11	(備考)		(備考)	C-13と同一個体
237	C-13	(備考)		(備考)	C-11と同一個体
238	C-20	(層位)	床面	(層位)	埋土
238	C-21	(層位)	埋土	(層位)	床面
238	C-54	(備考)		(備考)	床面
238	C-42	(備考)		(備考)	C-43と同一個体
239	C-49	(色別)	暗茶褐色	(色別)	暗茶褐色
239	C-52	(備考)		(備考)	C-53と接合
239	C-53	(備考)		(備考)	C-52と接合
239	C-54	(備考)		(備考)	B-12と同一個体
240	C-80	(層位)		(層位)	埋土
241	C-76	(備考)		(備考)	D-321と同一個体
242	D-31	(層位)		(層位)	床面
242	D-13	(備考)		(備考)	D-18と同一個体
243	D-18	(備考)		(備考)	D-13と同一個体
243	D-38	(備考)		(備考)	D-40と同一個体
243	D-40	(備考)		(備考)	D-38と同一個体
245	D-57	(備考)		(備考)	D-193と接合
245	D-63	(備考)		(備考)	D-66と接合
245	D-66	(備考)		(備考)	D-63と接合
245	D-86	(備考)	底部平底	(備考)	底部平底



頁	挿図番号	(分類)	誤	(分類)	正
247	D-127	(備考)		(備考)	E-402と接合
247	D-145	(備考)		(備考)	D-149と同一個体
247	D-149	(備考)		(備考)	D-145と同一個体
249	D-176	(備考)		(備考)	D-265と同一個体
249	D-193	(備考)		(備考)	D-67と接合
249	D-201	(備考)	ツズミ形	(備考)	ツズミ形
249	D-218	(備考)		(備考)	D-221と同一個体
250	D-242	(器種)	樽台	(器種)	高坪
250	D-260	(部位)	坪	(部位)	坪部
251	D-221	(備考)		(備考)	D-218と同一個体
251	D-265	(備考)		(備考)	D-176と同一個体
251	D-275	(備考)		(備考)	D-380と同一個体
253	D-287	(備考)	波瀾文	(備考)	波の波瀾文
253	D-321	(備考)		(備考)	C-76と同一個体
253	D-326	(備考)		(備考)	D-330と同一個体
253	D-329	(備考)		(備考)	D-383と同一個体
253	D-330	(備考)		(備考)	D-326と同一個体
254	D-368	(出土地点)		(出土地点)	D-SB4
254	D-368	(層位)	黒色有機土層	(層位)	床面
255	D-369	(備考)		(備考)	底部に彫刻的穿孔
255	D-380	(備考)		(備考)	D-275と同一個体
255	D-383	(備考)		(備考)	D-329と同一個体
256	B-226~ B-233	(出土地点)		(層位)	
256	C-106	(出土地点)		(層位)	
256	C-374	(出土地点)		(層位)	
256	C-106	(出土地点)		(層位)	
256	D-374	(出土地点)		(層位)	
257	D-392	(器種)	高坪	(器種)	樽台
257	D-388	(備考)		(備考)	D-390と接合
257	D-390	(備考)		(備考)	D-388と接合

図版正誤表

図版番号	位置	誤	正
第8	2	A-SZ2	A-SZ1
第15	2	B-SB3	C-SB11
第45	1	C-SB7	C-SB16
第45	2	C-SB8	C-SB16
第59	1		D-SB12
第60	1		D-SK2
第60	2		黒色有機土層

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第100集

なみ の うえ
浪 ノ 上

豊橋牛川浪ノ上東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

I

2009年3月

豊橋市教育委員会



1、A区全景(南南西から)



2、A区全景(南西から)

巻頭図版第2 A区方形周溝墓(1)



1、方形周溝墓A-SZ1(南東から)



2、方形周溝墓A-SZ1主体部(南から)



3、A-SZ1主体部 西壁(東から)



4、A-SZ1主体部 東壁(西から)



1、方形周溝墓A-S Z 2 (南から)



2、方形周溝墓A-S Z 3 (南東から)

巻頭図版第4 B区全景・竪穴住居址



1、B区全景(南から)



2、B区発掘風景(西から)



3、竪穴住居址B-SB4(南南東から)



4、竪穴住居址B-SB3(南から)



5、竪穴住居址B-SB3貯蔵穴(北から)



1、C区全景(北から)



2、竪穴住居址C-SB8(手前)とC-SB7(南東から)



1、D区全景(西から)



2、D区竪穴住居址群(南南東から)



1、竈穴住居址D-SB4内竈址(西から)



2、土壌D-SK2内出土土器(北北東から)



1、B-139



4、D-140



2、B-148



5、D-142(1)



3、D-78



6、D-142(2)

例 言

1. 本書は豊橋市牛川町字浪ノ上15番地、23～26番地、牛川町字西郷23～26番地、103～111番地において行われた豊橋牛川町浪ノ上東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査は豊橋市教育委員会が豊橋遺跡調査会（代表芳賀陽・日本考古学協会会員）に委託して行なった第1次調査と第2次調査、豊橋牛川浪ノ上東部土地区画整理組合（理事長金仙宗樹）が豊橋遺跡調査会に委託して行なった第3次調査・第4次調査である。調査期間は下記の通りである。

第1次調査 昭和56年5月31日～6月30日

第2次調査 昭和56年7月24日～9月7日

第3次調査 昭和57年3月24日～4月10日

第4次調査 昭和57年7月21日～9月10日

2. 調査担当者は第1次調査～第4次調査まで住吉政浩（日本考古学協会会員）があたり、第4次調査の浪ノ上1号墳と稲荷山2号墳は伊藤恵（日本考古学協会会員）が当たった。

調査員は、小畑頼孝（豊橋遺跡調査会調査員）である。なお調査補助員として愛知大学考古学研究会会員・桜丘高等学校考古学研究会会員、作業員として地元有志の協力をえた。

3. 浪ノ上1号墳の発掘調査には愛知県教育委員会から補助金を受け、昭和58（1983）年3月31日付けで『浪ノ上第1号墳調査概報』を作成し、愛知県教育委員会へ提出した。執筆・編集は調査担当者の伊藤恵が行なった。

4. 昭和56年度と昭和57年度の4次にわたる発掘調査報告書は、以下のように2冊に分割して刊行されることになった。

浪ノ上Ⅰ：位置と環境、調査の経過、A区の調査、B区の調査、C区の調査、D区の調査

浪ノ上Ⅱ：E区の調査、F区の調査、浪ノ上1号墳、稲荷山2号墳、考察、結語、付載 浪ノ上遺跡範囲確認調査第2・第8地区

5. 本書の作成にあたり、遺構・遺物の整理・実測・トレースは豊橋市美術博物館嘱託の岩本佳子、同館作業員の石川智江・井上佳子・大川絵里・大谷孝世・小出豊・戸倉まり子・永持優子・藤坂雅世・正木希依子・三室昌代・安田明己・山口恵子・山本裕子と伊藤恵・小畑頼孝・住吉政浩・芳賀陽・森田勝三が行なった。

石器の実測は賛元洋氏（豊橋市美術博物館）に依頼した。石器のうち剥片の実測・観察は小畑頼孝が行なった。

使用した写真のうち発掘調査は伊藤恵・住吉政浩・小畑頼孝が撮影したものである。遺物の写真は小出豊・大谷孝世と伊藤恵・住吉政浩の協力をえて芳賀陽が撮影したものである。

6. 石材の同定は家田健吾氏（豊橋市地下資源館）に依頼した。

7. 本書の執筆は以下のようである。なお編集は芳賀陽・伊藤恵・住吉政浩が行なった。

第1章第1節・第2章・第3章～第6章の遺構	住吉政浩
第1章第2節	芳賀 陽
第1章第3節・第2章第5節	伊藤 恵
第3章～第6章の遺物	小畑頼孝

8. 本文中では、下記のような記号・略語・約束に基づいて記載した。

S B…住居址、竪穴住居址、掘立柱建物址	A - S B 1	A区の住居址 1
S D…溝	B - S D 2	B区の溝 2
S K…土壌	C - S K 3	C区の土壌 3
S Z…土壌墓、方形周溝墓、古墳	D - S Z 4	D区の土壌墓 4
P …柱穴、杭穴	P 5	5番目の柱穴
貯 …貯蔵穴	貯 6	6番目の貯蔵穴
炉 …炉址	炉 7	7番目の炉址
P 1 (○×○×○) …	柱穴P 1の（長径×短径×深さ）、-は数値不明	
P 1～P 2…	柱穴間の長さ（柱穴の中心から柱穴の中心までの長さ）	
東西壁・南北壁の幅…	壁の下端から対する壁の下端までの長さ	
床面積…	東西の床面の長さ×南北の床面の長さの積、隅円の場合円形部分を	

割り出し面積を求めることにした

遺物の実測図の縮尺は3分の1を基本とする。ただし、石器の大きなものは4分の1に、石器・鉄器の小さなものは2分の1に縮小し、実測図の遺物番号に（1/4）、（1/2）と明記した。

写真図版でA-①、B-②とあるのは、実測図がなく写真のみの遺物番号である。

9. 本文中で用いた遺構番号・遺物番号は各区ごとに通し番号を付し、挿図・遺物観察表・写真図版ともに共通である。

10. 発掘調査から報告書を作成するまでに久永春男氏、斎藤嘉彦氏、川崎みどり氏からご教示・ご指導を戴いた。

11. 本書に使用した実測図・写真・出土遺物は豊橋市教育委員会において保管・管理している。

本文目次

第1章	位置と環境	1
第1節	浪ノ上遺跡の位置	1
第2節	地理的環境	2
第3節	歴史的環境	6
第2章	調査の経過	27
第1節	本調査に至るまでの経緯	27
第2節	第1次調査	31
第3節	第2次調査	33
第4節	第3次調査	34
第5節	第4次調査	36
第3章	A区の調査	43
第1節	堅穴住居址	45
第2節	土壌	47
第3節	方形周溝墓	53
第4章	B区の調査	68
第1節	堅穴住居址	71
第2節	土壌	98
第3節	遺物包含層	102
第5章	C区の調査	117
第1節	堅穴住居址	119
第2節	土壌	150
第3節	遺物包含層	151
第6章	D区の調査	158
第1節	堅穴住居址・掘立柱建物址	161
第2節	土壌	193
第3節	溝	201
第4節	土壌墓	202
第5節	遺物包含層	203

浪ノ上Ⅱ 本文目次（予定）

第1章 E区の調査

第2章 F区の調査

第3章 浪ノ上1号墳

第4章 稲荷山2号墳

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定1

第2節 放射性炭素年代測定2

第3節 方形周溝墓1土坑内埋土のリン・カルシウム分析

第4節 土器の胎土材料

第5節 浪ノ上1号墳出土土器の赤色顔料分析

第6章 考察

第1節 浪ノ上遺跡出土の押型文土器と石器

第2節 浪ノ上遺跡出土の弥生式土器と古式土師器

第3節 浪ノ上遺跡の集落構成

第4節 方形周溝墓と方墳

第7章 結語

付載 浪ノ上遺跡範囲確認調査第2・第8地区

挿図目次

挿図第1 浪ノ上遺跡の位置	1
挿図第2 豊川下流の地形	3
挿図第3 浪ノ上遺跡付近の地形	4
挿図第4 浪ノ上遺跡周辺の遺跡	7
挿図第5 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(1)	13
挿図第6 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(2)	14
挿図第7 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(3)	15
挿図第8 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(4)	16
挿図第9 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(5)	17
挿図第10 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(6)	18
挿図第11 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(7)及び同町字城ノ内表採遺物	19
挿図第12 豊橋市中野遺跡表採遺物	20
挿図第13 豊橋市東野遺跡、段塚古墳、向坪古墳表採遺物	21
挿図第14 豊橋市稲荷前遺跡採集遺物	22
挿図第15 豊橋市稲荷前遺跡、浪ノ上遺跡、仁連木遺跡、西小鷹野遺跡採集遺物	23
挿図第16 豊橋市吉田城址表採遺物	24
挿図第17 浪ノ上遺跡の範囲	27
挿図第18 1979年度の範囲確認調査地点	28
挿図第19 豊橋市牛川町字浪ノ上・字西郷地区の新(下)旧(上)地籍図	29
挿図第20 浪ノ上遺跡の各調査区	30
挿図第21 A区の発掘状況と新聞報道	32
挿図第22 削平された木下B地区・木下C地区と新聞報道	33
挿図第23 作業終了後の学習会風景	34
挿図第24 加藤氏宅北側D区の調査状況と新聞報道	35
挿図第25 正円寺墓地。調査前の状況と検出した土壌墓	36
挿図第26 第4次D区の調査風景と新聞報道	37
挿図第27 E区の調査状況	38
挿図第28 浪ノ上1号墳の調査状況と新聞報道	39
挿図第29 稲荷山2号墳の調査状況	40
挿図第30 発掘調査を伝える新聞報道	41
挿図第31 現地説明会と新聞報道	42
挿図第32 A区における遺構の分布	43
挿図第33 竪穴住居址A-SB1実測図	44

挿図第34 竪穴住居址A-SB2実測図	46
挿図第35 土壌A-SK1~SK22の位置	48
挿図第36 方形周溝墓A-SZ1実測図(1)	54
挿図第37 方形周溝墓A-SZ1実測図(2)	55
挿図第38 方形周溝墓A-SZ1主体部実測図	56
挿図第39 方形周溝墓A-SZ2・A-SZ3実測図(1)	58
挿図第40 方形周溝墓A-SZ2・A-SZ3実測図(2)	59
挿図第41 方形周溝墓A-SZ2・A-SZ3実測図(3)	60
挿図第42 方形周溝墓A-SZ4実測図	61
挿図第43 方形周溝墓A-SZ5実測図	62
挿図第44 A区出土 遺物実測図1 (SB1・SB2・SK1・SK3・SK4 ・SK5・SK9・SK13・SK16)	64
挿図第45 A区出土 遺物実測図2 (SZ1)	65
挿図第46 A区出土 遺物実測図3 (SZ1・SZ2)	66
挿図第47 A区出土 遺物実測図4 (SZ2・SZ3・SZ4・SZ5)	67
挿図第48 B区全体における遺構の分布	68
挿図第49 B区における遺構の分布1	69
挿図第50 B区における遺構の分布2	70
挿図第51 竪穴住居址B-SB1・B-SB2実測図	72
挿図第52 竪穴住居址B-SB3実測図	74
挿図第53 竪穴住居址B-SB4実測図	76
挿図第54 竪穴住居址B-SB5実測図	77
挿図第55 竪穴住居址B-SB6実測図	78
挿図第56 竪穴住居址B-SB7実測図	80
挿図第57 竪穴住居址B-SB8実測図	82
挿図第58 竪穴住居址B-SB9実測図	84
挿図第59 竪穴住居址B-SB10実測図	86
挿図第60 竪穴住居址B-SB13・B-SB14実測図	88
挿図第61 竪穴住居址B-SB15・B-SB16実測図	90
挿図第62 竪穴住居址B-SB17・B-SB19・B-SB23実測図	92
挿図第63 竪穴住居址B-SB18実測図	94
挿図第64 竪穴住居址B-SB21実測図	96
挿図第65 土壌B-SK4・B-SK5・B-SK10・B-SK16実測図	100
挿図第66 B区出土 遺物実測図1 (SB1・SB2・SB3)	105
挿図第67 B区出土 遺物実測図2 (SB4・SB5・SB6)	106
挿図第68 B区出土 遺物実測図3 (SB6・SB7・SB8)	107

挿図第69 B区出土 遺物実測図4 (SB8・SB9)	108
挿図第70 B区出土 遺物実測図5 (SB10・SB12・SB13)	109
挿図第71 B区出土 遺物実測図6 (SB13・SB14・SB17)	110
挿図第72 B区出土 遺物実測図7 (SB17・SB18)	111
挿図第73 B区出土 遺物実測図8 (SB18・SB19・SB20)	112
挿図第74 B区出土 遺物実測図9 (SB21・SB22・SB23・SK4)	113
挿図第75 B区出土 遺物実測図10 (SK10・黒色有機土層)	114
挿図第76 B区出土 遺物実測図11 (黒色有機土層)	115
挿図第77 B区出土 遺物実測図12 (黒色有機土層・表採)	116
挿図第78 C区全体における遺構の分布	117
挿図第79 C区における遺構の分布1	118
挿図第80 C区における遺構の分布2	119
挿図第81 竪穴住居址C-SB1実測図	120
挿図第82 竪穴住居址C-SB2実測図	122
挿図第83 竪穴住居址C-SB3実測図	123
挿図第84 竪穴住居址C-SB4実測図	124
挿図第85 竪穴住居址C-SB5実測図	125
挿図第86 竪穴住居址C-SB6実測図	126
挿図第87 竪穴住居址C-SB7実測図(1)	128
挿図第88 竪穴住居址C-SB7実測図(2)	129
挿図第89 竪穴住居址C-SB8実測図	131
挿図第90 竪穴住居址C-SB9実測図	132
挿図第91 竪穴住居址C-SB10実測図	134
挿図第92 竪穴住居址C-SB11実測図	135
挿図第93 竪穴住居址C-SB12・C-SB13実測図	136
挿図第94 竪穴住居址C-SB14実測図	138
挿図第95 竪穴住居址C-SB15実測図	140
挿図第96 竪穴住居址C-SB16実測図	141
挿図第97 竪穴住居址C-SB17実測図(1)	142
挿図第98 竪穴住居址C-SB17実測図(2)	143
挿図第99 竪穴住居址C-SB18実測図	145
挿図第100 竪穴住居址C-SB19実測図	146
挿図第101 竪穴住居址C-SB20・C-SB21・C-SB22実測図	148
挿図第102 C区出土 遺物実測図1 (SB1・SB2)	153
挿図第103 C区出土 遺物実測図2 (SB3・SB4・SB5・SB6 ・SB7・SB8・SB10)	154

挿図第104 C区出土 遺物実測図3 (SB10・SB11・SB12・SB14)	155
挿図第105 C区出土 遺物実測図4 (SB16・SB17・SB18・SB19・SB21・SB22)	156
挿図第106 C区出土 遺物実測図5 (黒色有機土層、表採)	157
挿図第107 D区全体における遺構の分布	158
挿図第108 D区における遺構の分布1	159
挿図第109 D区における遺構の分布2	160
挿図第110 D区における遺構の分布3	161
挿図第111 竪穴住居址D-SB1・D-SB3・D-SB7実測図	162
挿図第112 竪穴住居址D-SB2実測図	164
挿図第113 竪穴住居址D-SB4・D-SB6・D-SB9実測図	166
挿図第114 竪穴住居址D-SB5実測図	168
挿図第115 竪穴住居址D-SB8実測図	170
挿図第116 竪穴住居址D-SB10実測図	172
挿図第117 竪穴住居址D-SB11・D-SB12実測図	174
挿図第118 竪穴住居址D-SB13実測図	176
挿図第119 竪穴住居址D-SB14・D-SB15・D-SB16実測図	177
挿図第120 竪穴住居址D-SB17・D-SB18実測図	180
挿図第121 竪穴住居址D-SB19・D-SB20、土壇D-SK2・D-SK6実測図	181
挿図第122 竪穴住居址D-SB21・D-SB22実測図	183
挿図第123 竪穴住居址D-SB23、土壇D-SK3・D-SK4・D-SK10、 土壇墓D-SZ1、溝D-SD1実測図	183
挿図第124 竪穴住居址D-SB24、土壇D-SK1、溝D-SD2実測図	187
挿図第125 竪穴住居址D-SB25・D-SB26・D-SB27実測図	189
挿図第126 掘立柱建物址D-SB28実測図(1)	191
挿図第127 掘立柱建物址D-SB28実測図(2)	192
挿図第128 土壇D-SK2実測図	194
挿図第129 土壇D-SK16~D-SK22、土壇墓D-SZ3~D-SZ8実測図	198
挿図第130 D区出土 遺物実測図1 (SB1・SB2・SB3・SB4)	206
挿図第131 D区出土 遺物実測図2 (SB4・SB5・SB6・SB10)	207
挿図第132 D区出土 遺物実測図3 (SB10・SB11・SB12・SB13)	208
挿図第133 D区出土 遺物実測図4 (SB14・SB15)	209
挿図第134 D区出土 遺物実測図5 (SB16・SB18・SB19・SB20)	210
挿図第135 D区出土 遺物実測図6 (SB21・SB22・SB23)	211
挿図第136 D区出土 遺物実測図7 (SB23)	212
挿図第137 D区出土 遺物実測図8 (SB23)	213
挿図第138 D区出土 遺物実測図9 (SB23)	214

挿図第139	D区出土	遺物実測図10 (SB23・SB24)	215
挿図第140	D区出土	遺物実測図11 (SK 1・SK 2)	216
挿図第141	D区出土	遺物実測図12 (SK 2)	217
挿図第142	D区出土	遺物実測図13 (SK 2)	218
挿図第143	D区出土	遺物実測図14 (SK 2・SK 4)	219
挿図第144	D区出土	遺物実測図15 (SK 9・SK18・SK22・SK23、SD 1)	220
挿図第145	D区出土	遺物実測図16 (SD 1・SD 2、SZ 2、黒色有機土層)	221
挿図第146	D区出土	遺物実測図17 (黒色有機土層)	222
挿図第147	D区出土	遺物実測図18 (黒色有機土層)	223
挿図第148	D区出土	遺物実測図19 (黒色有機土層)	224
挿図第149	D区出土	遺物実測図20 (黒色有機土層、表採)	225

表 目 次

表第 1	豊橋市石巻本町字概割表採遺物観察表	25
表第 2	豊橋市石巻本町字城ノ内表採遺物観察表	26
表第 3	豊橋市中野遺跡表採遺物観察表	26
表第 4	豊橋市東野遺跡表採遺物観察表	26
表第 5	豊橋市段塚古墳・向坪古墳表採遺物観察表	26
表第 6	豊橋市稲荷前遺跡採集遺物観察表	26
表第 7	豊橋市稲荷前・浪ノ上・仁連木遺跡他採集遺物観察表	26
表第 8	豊橋市吉田城址表採遺物観察表	26
表第 9	D-SB28 柱穴の規模一覧表	193
表第10	浪ノ上遺跡A区出土 土器観察表	226
表第11	浪ノ上遺跡B区出土 土器観察表	228
表第12	浪ノ上遺跡C区出土 土器観察表	236
表第13	浪ノ上遺跡D区出土 土器観察表	242
表第14	浪ノ上遺跡A～D区出土 石器観察表	256
表第15	浪ノ上遺跡B～D区出土 鉄器観察表	258

図版目次

巻頭図版

- 巻頭図版第1 A区全景 1、A区全景 2、A区全景
- 巻頭図版第2 A区方形周溝墓(1) 1、方形周溝墓A-SZ1 2、方形周溝墓A-SZ1主体部
3、A-SZ1主体部 西壁 4、A-SZ1主体部 東壁
- 巻頭図版第3 A区方形周溝墓(2) 1、方形周溝墓A-SZ2 2、方形周溝墓A-SZ3
- 巻頭図版第4 B区全景・竪穴住居址 1、B区全景 2、B区発掘風景
3、竪穴住居址B-SB4 4、竪穴住居址B-SB3
5、竪穴住居址B-SB3貯蔵穴
- 巻頭図版第5 C区全景・竪穴住居址 1、C区全景 2、竪穴住居址C-SB8とC-SB7
- 巻頭図版第6 D区全景・竪穴住居址 1、D区全景 2、D区竪穴住居址群
- 巻頭図版第7 D区竈址・土壇内出土土器 1、竪穴住居址D-SB4内竈址
2、土壇D-SK2内出土土器
- 巻頭図版第8 赤彩土器 1、B-139 2、B-148 3、D-78
4、D-140 5、D-142(1) 6、D-142(2)

写真図版

- 図版第1 A区(1) 1、A区遠景
2、A区近景
- 図版第2 A区(2) 1、方形周溝墓A-SZ1
2、方形周溝墓A-SZ1の調査状況
- 図版第3 A区(3) 1、方形周溝墓A-SZ1の南西部周溝内における壺出土状況
2、方形周溝墓A-SZ1の南東部周溝内における壺出土状況
- 図版第4 A区(4) 1、方形周溝墓A-SZ1の主体部
- 図版第5 A区(5) 1、方形周溝墓A-SZ1主体部の東壁
2、方形周溝墓A-SZ1主体部の西壁
- 図版第6 A区(6) 1、方形周溝墓A-SZ2の調査状況
2、方形周溝墓A-SZ2
- 図版第7 A区(7) 1、方形周溝墓A-SZ2の北東部周溝
2、方形周溝墓A-SZ2南西隅周溝内遺物出土状況

- 図版第8 A区(8) 1、方形周溝墓A-SZ2の南西隅における遺物出土状況
2、方形周溝墓A-SZ2の北西部周溝内における遺物出土状況
- 図版第9 A区(9) 1、方形周溝墓A-SZ3
2、方形周溝墓A-SZ3
- 図版第10 A区(10) 1、方形周溝墓A-SZ3の北東部における遺物出土状況
2、集石遺構
- 図版第11 A区(11) 1、方形周溝墓A-SZ1・SZ2・SZ3と竪穴住居址A-SB1
2、方形周溝墓A-SZ2と竪穴住居址A-SB2
- 図版第12 A区(12) 1、A-35 2、A-36 3、A-39 4、A-40 5、A-41
6、A-43
- 図版第13 A区(13) 1、A-44 2、A-47 3、A-48 4、A-49 5、A-27
6、A-28 7、A-60 8、A-34 9、A-①
- 図版第14 B区(1) 1、B区全景
2、竪穴住居址B-SB3
- 図版第15 B区(2) 1、竪穴住居址B-SB3
2、竪穴住居址B-SB3の貯蔵穴
- 図版第16 B区(3) 1、竪穴住居址B-SB4
2、竪穴住居址B-SB5・B-SB6・B-SB7・B-SB8の調査風景
- 図版第17 B区(4) 1、竪穴住居址B-SB6・B-SB5
2、竪穴住居址B-SB5・B-SB6
- 図版第18 B区(5) 1、竪穴住居址B-SB9・B-SB7・B-SB5・B-SB6
2、竪穴住居址B-SB7・B-SB8、土壇B-SK4
- 図版第19 B区(6) 1、竪穴住居址B-SB9・B-SB10・B-SB11
2、竪穴住居址B-SB9
- 図版第20 B区(7) 1、竪穴住居址B-SB8
2、竪穴住居址B-SB9・B-SB7
- 図版第21 B区(8) 1、竪穴住居址B-SB9
2、竪穴住居址B-SB13・B-SB14の発掘調査風景
- 図版第22 B区(9) 1、竪穴住居址B-SB18
2、竪穴住居址B-SB18
- 図版第23 B区(10) 1、竪穴住居址B-SB17・B-SB19
2、竪穴住居址B-SB17の貯蔵穴と遺物出土状況
- 図版第24 B区(11) 1、組み合わさった状態で出土した壺と埴
2、鋤先の出土状況
- 図版第25 B区(12) 1、竪穴住居址B-SB5の貯蔵穴における遺物出土状況
2、竪穴住居址B-SB21の貯蔵穴付近の遺物出土状況

- 図版第26 B区(13) 1、B-6 2、B-9 3、B-20 4、B-21 5、B-23
6、B-25
- 図版第27 B区(14) 1、B-30 2、B-32 3、B-36 4、B-37 5、B-44
6、B-56
- 図版第28 B区(15) 1、B-60 2、B-63 3、B-65 4、B-67 5、B-68
6、B-70
- 図版第29 B区(16) 1、B-72 2、B-74 3、B-82 4、B-83 5、B-85
6、B-86
- 図版第30 B区(17) 1、B-87 2、B-90 3、B-158 4、B-92 5、B-93
6、B-96
- 図版第31 B区(18) 1、B-113 2、B-118 3、B-122 4、B-136 5、B-142
6、B-144
- 図版第32 B区(19) 1、B-164 2、B-172 3、B-186 4、B-192 5、B-212
6、B-214
- 図版第33 B区(20) 1、B-215 2、B-216 3、B-220 4、B-221 5、B-217
6、B-223
- 図版第34 B区(21) 1、B-① 2、B-② 3、B-78 4、B-81 5、B-151
6、B-226 7、B-233 8、B-229 9、B-227 10、B-228
11、B-8 12、B-123 13、B-③ 14、B-174
- 図版第35 B区(22) 1、B-47 2、B-231 3、B-④ 4、B-146 5、B-⑤
6、B-124
- 図版第36 C区(1) 1、C区竪穴住居址群、手前左下C-SB5、右上C-SB7
2、C区竪穴住居址群、手前右からC-SB5・C-SB4・C-SB3
- 図版第37 C区(2) 1、C区竪穴住居址群、左上C-SB2・C-SB1
2、C区竪穴住居址群、手前からC-SB2・C-SB1
- 図版第38 C区(3) 1、C区竪穴住居址群、手前からC-SB3・C-SB4・C-SB5
2、C区竪穴住居址群、C-SB4
- 図版第39 C区(4) 1、竪穴住居址群、C-SB7他
2、C区竪穴住居址群、手前からC-SB6・C-SB10・C-SB12・
C-SB13・SB19
- 図版第40 C区(5) 1、C区竪穴住居址群、手前右からC-SB1・C-SB2・C-SB3、手
前左からC-SB12・C-SB10・C-SB6
2、C区竪穴住居址群、手前からC-SB6・C-SB10・C-SB12・
C-SB13・C-SB19
- 図版第41 C区(6) 1、竪穴住居址C-SB1(中央)とC-SB2(左)
2、竪穴住居址手前からC-SB2・C-SB1・C-SB6

- 図版第42 C区(7) 1、竪穴住居址C-SB7、手前左C-SB11・右C-SB14
2、竪穴住居址C-SB7の貯蔵穴
- 図版第43 C区(8) 1、竪穴住居址C-SB15
2、竪穴住居址C-SB15
- 図版第44 C区(9) 1、竪穴住居址C-SB16
2、竪穴住居址C-SB17
- 図版第45 C区(10) 1、竪穴住居址C-SB7の貯蔵穴付近における遺物出土状況
2、竪穴住居址C-SB8における遺物出土状況
- 図版第46 C区(11) 1、竪穴住居址C-SB10における遺物出土状況
2、C区における遺物出土状況
- 図版第47 C区(12) 1、C-5 2、C-9 3、C-12 4、C-36 5、C-45
6、C-58 7、C-67 8、C-70
- 図版第48 C区(13) 1、C-75 2、C-86 3、C-108 4、C-112 5、C-①
6、C-37 7、C-38 8、C-39 9、C-62
- 図版第49 D区(1) 1、手前がE区と浪ノ上1号墳、右奥がD区
2、D区竪穴住居址群、手前右がD-SB7・D-SB1
- 図版第50 D区(2) 1、D区竪穴住居址群、手前右がD-SB7・D-SB1・D-SB2、
手前左D-SB4
2、D区住居址群、左手前からD-SB4・D-SB9・D-SB6、
右手前からD-SB7・D-SB1・D-SB2・D-SB5
- 図版第51 D区(3) 1、竪穴住居址D-SB7・D-SB1
2、竪穴住居址D-SB1・D-SB7
- 図版第52 D区(4) 1、竪穴住居址D-SB4
2、竪穴住居址D-SB4の台石を備えた竈址
- 図版第53 D区(5) 1、竪穴住居址手前からD-SB5・D-SB2
2、掘立柱建物址D-SB28
- 図版第54 D区(6) 1、竪穴住居址D-SB10と掘立柱建物址D-SB28
2、竪穴住居址D-SB14・D-SB15
- 図版第55 D区(7) 1、D区竪穴住居址群、手前がD-SB10、左からD-SB11・D-SB12
2、竪穴住居址D-SB10
- 図版第56 D区(8) 1、D区竪穴住居址群、D-SB1～D-SB9
2、土壇D-SK2における遺物出土状況
- 図版第57 D区(9) 1、土壇D-SK1(手前)とD-SK2における遺物出土状況
2、土壇D-SK2(手前)とD-SK1における遺物出土状況
- 図版第58 D区(10) 1、土壇D-SK2における遺物出土状況1
2、土壇D-SK2における遺物出土状況2

- 図版第59 D区(11) 1、D区における遺物の出土状況1
2、土壌墓D-SZ8における人骨出土状況
- 図版第60 D区(12) 1、D区における遺物出土状況2
2、D区における遺物出土状況3
- 図版第61 D区(13) 1、D区における遺物出土状況4
2、D区における遺物出土状況5
- 図版第62 D区(14) 1、D-1 2、D-12 3、D-17 4、D-18 5、D-19
6、D-20
- 図版第63 D区(15) 1、D-21 2、D-24 3、D-29 4、D-36 5、D-43
6、D-44
- 図版第64 D区(16) 1、D-45 2、D-47 3、D-50 4、D-57 5、D-62
6、D-64
- 図版第65 D区(17) 1、D-65 2、D-66 3、D-67 4、D-77 5、D-83・D-84
6、D-85
- 図版第66 D区(18) 1、D-97 2、D-105 3、D-110 4、D-120 5、D-133
6、D-136
- 図版第67 D区(19) 1、D-139 2、D-① 3、D-153 4、D-140
- 図版第68 D区(20) 1、D-162 2、D-168 3、D-169 4、D-170 5、D-172
6、D-174
- 図版第69 D区(21) 1、D-180 2、D-181 3、D-190 4、D-193 5、D-194
6、D-215
- 図版第70 D区(22) 1、D-220 2、D-217 3、D-233 4、D-234 5、D-235
6、D-237
- 図版第71 D区(23) 1、D-238 2、D-239 3、D-241 4、D-243 5、D-245
6、D-248
- 図版第72 D区(24) 1、D-251 2、D-252 3、D-253 4、D-254 5、D-255
6、D-260
- 図版第73 D区(25) 1、D-261 2、D-265 3、D-266 4、D-268 5、D-274
6、D-277
- 図版第74 D区(26) 1、D-281 2、D-287 3、D-297 4、D-298 5、D-320
6、D-330
- 図版第75 D区(27) 1、D-359 2、D-368 3、D-373 4、D-388 5、D-389
6、D-390
- 図版第76 D区(28) 1、D-9 2、D-374 3、D-273 4、D-375の1 5、D-375の2
- 図版第77 D区(29) 1、D-376の1 2、D-376の2 3、D-376の3
4、D-377 5、D-378 6、D-②

第1章 位置と環境

第1節 浪ノ上遺跡の位置

豊橋駅東口を出て、駅前大通りを市電（豊橋鉄道東田本線）の線路に沿って東へ600m進むと新川の交差点に至る。そこを左折して市電の線路に沿って田原街道（国道259号）を550m北に行くと歩道橋のある西八町の交差点で国道1号に合流する。この交差点を右折して市電沿いに850m進むと東八町の五叉路に出る。ここで国道1号と別れ、市電に沿って主要地方道豊橋大知波線を150m進むと旭橋の交差点に至る。ここで市電と別れ、この交差点を左折し、牟呂用水路を右手に見て主要地方道豊橋鳳来線を新城方面に1100m北進すると若宮橋の交差点に至る。この交差点を右折し次の信号機のあ



挿図第1 浪ノ上遺跡の位置（国土地理院 1/50,000 地形図に加筆）

る交差点を左折すると、右手前方に青陵中学校の校舎が見える。眼鏡上池を埋め立てて造成された牛川東郷公園を右手に見てさらに進むとバス停「金田口」に至る。このバス停から進行方向に250m進むと右手に「さわらび荘」の案内板が設置されている。この案内板の矢印に従って左方向へ進むと左手に正円寺がある。さらに300m西に行くと左手に特別養護老人ホーム「さわらび荘」があり、右手に浪ノ上公園がある。そこから北東100mの所に浪ノ上区画整理記念館があり、敷地内には区画整理記念碑が建てられている。この記念館周辺から保存されている稲荷山1号墳に至るまでの一帯が、浪ノ上遺跡や浪ノ上1号墳、稲荷山2号墳が所在していた所である。

別途をたどるならば、前記の旭橋の交差点からさらに、市電線路に沿って主要地方道豊橋大知線を東進すると市電の停留所「東田坂上」に至る。この東田の交差点を左折して主要地方道東三河環状線に入る。この環状線を北東に3200m進むと右手に三菱レイヨンの社宅や工場の建物が目に入り、「金田住宅」の標識のある交差点に出る。この交差点を左折して100m行くと県道豊橋八名線（別所街道）に達する。ここを左折し60m進んで右にまがると左手前方に正円寺がある。正円寺から先の説明は上記と同じである。

公共交通機関を利用するならば、豊橋駅東口バス乗り場7番から和田辻行きに乗車し、14番目のバス停「金田口」で降車する。バスの所用時間は約20分である。バスの進行方向に100m進み、左折するとすぐ右手に牛川育英幼稚園が見える。そのまま80m程西進し、そこを右折して三つ目の道を左にまがると「特別養護老人ホームさわらび荘」があり、左折した右側に浪ノ上公園がある。

現在は住宅地となり、発掘した当時の面影は残っていない。かつての位置を知る手がかりとなるものは、保存されている稲荷山1号墳、位置が移動していない「特別養護老人ホームさわらび荘」、発掘当時から居住されていた加藤正司氏宅である。

第2節 地理的環境

1、豊川中・下流域の地形

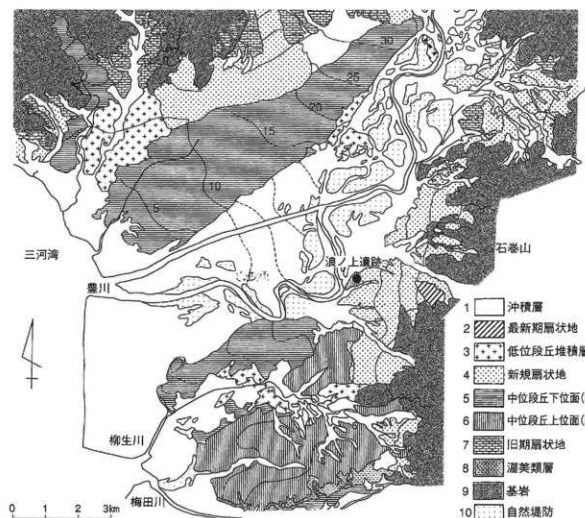
東三河の地形の基盤をなす地質は中央構造線によって大きく二分されている。領家層群によって構成されている三河高原を中心とした内帯側と、秩父層群によって構成される弓張山脈から渥美半島の連山につづく外帯側である。

この地方で最大の河川である豊川は両側につづく山地を分け、中央構造線に沿って南下西流して三河湾に注いでいる。豊川の中・下流域では左右の山地と豊川が流下する沖積地との間に幾段もの河岸段丘が形成されている。これらの段丘面は大きく高位段丘面（UT）・旧期扇状地面（OF）・中位段丘上位面（MI）・中位段丘下位面（MII）・新期扇状地面（YF）・低位段丘上位面（LI）・低位段丘下位面（LII）に分別されている（註1）。これらの段丘は沖積地から伸びる幾つかの侵食谷によって分断されている。

中央構造線の内帯にあたる右岸の三河高原の南東山麓では、高位段丘面群に矢部面と信玄面、旧期扇状地面に足山田面、中位段丘下位面に新城面と小坂井面、新期扇状地面に上長山面、下位段丘上位面に石田面、下位段丘下位面に牧野面が当てられているが、中位段丘上位面を欠いている（註1）。

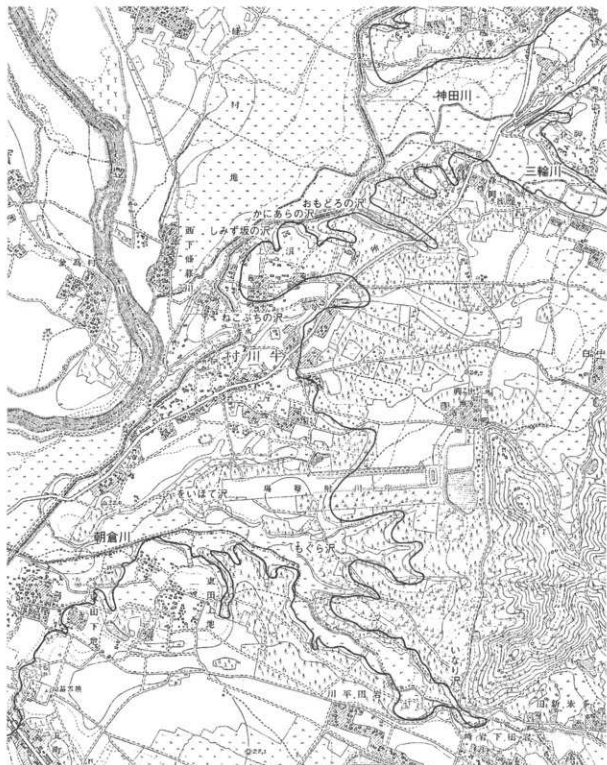
中央構造線の外帯にあたる豊川左岸に形成されている河岸段丘は、高位段丘面として小野田面、旧期扇状地に平野面、中位段丘高位面には高師原面と豊橋上位面、中位段丘下位面には豊橋下位面（Ⅰ面・Ⅱ面・Ⅲ面に細別）、新期扇状地には牛川面、下位段丘Ⅰ面には庭野面、下位段丘Ⅱ面には柳生川下位面が当てられている。松明峠南麓から渥美連山の山麓にかけて、太平洋岸に沿って東西に伸びている天伯原面は天竜川系の堆積とされている二川層群・渥美層群の背面で、高位段丘面に属している。その三河湾側には、渥美層群と不整合の関係を持つ豊川系の中位段丘面である福江面および下位段丘面が広がっている。

これら左右の河岸段丘に挟まれた豊川下流の沖積地は右側を小坂井段丘、左側を豊橋下位段丘がつくる段丘崖によって画されて豊橋沖積平野を形成している。この沖積平野は豊橋市賀茂町付近から河口にかけて大きく広がり、幅が3km～4kmにおよんでいる。その中で豊川がたびたび流路を変えながら蛇行して流下しており、各所に自然堤防が形成されている。また河口部には湾岸流の作用によって形成された海岸砂丘が形成され、三河湾と沖積平野を画している。この豊川沖積平野はウルム氷期後の海進にともなう堆積によって形成され、その上部は縄文海進による堆積である。この面が弥生時



挿図第2 豊川下流の地形（木村一郎他「註1」による）

代の小海退もたらした侵食によって、縄文晩期から弥生時代の遺跡が分布する微高地と浅谷からなる地形が形成された。この地形は、その後の小海進による堆積の進行と、小海退による侵食の繰り返しのによって現在の地形が出来上がっている（註2）。



挿図第3 浪ノ上遺跡付近の地形（大日本陸地測量部二万分の一地形図「豊橋近傍四号」に加筆）

2、牛川段丘の地形

浪ノ上遺跡が所在する牛川段丘は、外帯の弓張山脈と豊川沖積地の間を占める中位段丘下位面に相等する河岸段丘である。段丘の上面は東側に展開する弓張山系の山地から流出して形成された新时期状地に覆われており、山麓付近では標高30m前後を測る。豊川沖積地に接する西端部では標高が20m前後となり、全体として西に向かって緩やかに傾斜する地形が形成されている。

段丘の北縁は段丘崖をなし、神田川の流れる谷によって玉川段丘と画され、神田川の支流である三輪川の流れる谷によって石巻段丘と画されている。段丘の西縁は急峻な段丘崖を形成して豊川沖積平野に接しており、崖に沿って神野新田の灌漑用水である幸呂用水が建設されている。段丘南縁は朝倉川が流れる谷によって豊橋段丘と画されている。

牛川段丘地の縁辺には、この地方で沢と呼ばれている小侵食谷（註3）が各所に刻まれている。南縁の朝倉川ぞいでは、東から山魁と台地を分ける小谷である「いなり沢」、南縁中程に並んで開口している「もぐら沢」と「中沢」、南縁西寄りに開口して牛川段丘の南半部を東西に二分している「をいほて沢」が存在する。豊川沖積地に面した段丘の西縁には、五本の小侵食谷が開口している。そのうち「はんの木沢」→「眼鏡池」→「ねこぶちの沢」とつづく谷は規模が大きく、牛川段丘を南北に二分割している。この沢の南側は西側支丘である。この沢の北側は浪ノ上支丘で、小谷「しみずさかの沢」・「かにあらゐの沢」をへて北につづき、「おもどろの沢」によって中野支丘と画されている。中野支丘の北側には森岡支丘と狭間支丘が、どちらも小谷で画されて南北に並んでいる。これらの支丘の縁辺部にはいろいろな時代の遺跡が分布している。浪ノ上遺跡はこれらの支丘群のうち浪ノ上支丘の縁端部沿いに展開している。

註1 木村一朗他「豊川中流および下流の段丘と更新統」『愛知教育大学研究報告30』愛知教育大学 1981

註2 井関弘太郎「瓜郷遺跡の自然環境」『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

井関弘太郎「篠東遺跡の地形環境」『篠東第1次報告』愛知県小坂井町教育委員会 1960

井関弘太郎「吉浜遺跡の自然環境」『篠東遺跡群』小坂井町教育委員会 1998

註3 石川一美『牛河』1959

参考文献

- ・土 隆一「瀬美半島周辺の第四系の地史学的問題」『第四紀研究1-4』1960
- ・町田 貞・大倉陽子「豊川中下流域の段丘地形」『地理学評論33-11』1960
- ・式 正英「豊橋付近の台地および埋没地形面について」『地理学評論36-6』1963
- ・堀和 明「豊川中・下流における後期更新世以降の地形発達史」『地理学評論71A-4』1998
- ・藤城信幸「瀬美半島の地形・地質」『山崎遺跡』田原町教育委員会 1993
- ・菅谷義之「東三河大地のなりたち」鳳来寺自然科学博物館 1984
- ・『とよはし地学めぐり』豊橋地学同好会 1980
- ・池田芳雄「大地は語る」1985

第3節 歴史的環境

浪ノ上遺跡（註1）が所在する牛川段丘は、愛知県豊橋市の東北部に位置し、忠興八幡社が座す残丘を扇の要として半径1.5kmの扇形の台地である。浪ノ上遺跡は、その扇端をなす円弧の中心に在る。

浪ノ上遺跡の歴史的環境を述べるに当り、まず牛川段丘上の諸遺跡を記し、浪ノ上の変遷を概観する。次に牛川段丘上の浪ノ上の北から西にあって常に豊川の洪水、氾濫とたたかてきた沖積地の遺跡を述べよう。さらに、牛川段丘の北東の石巻段丘南西部、玉川段丘南部の遺跡との対比を試み、最後に朝倉川左岸の豊橋段丘北東部の遺跡をまとめたい。また文末に浪ノ上周辺遺跡の表探遺物を挿図とし、遺物観察表を付して参考に供する。

1、浪ノ上遺跡が所在する牛川段丘の遺跡群

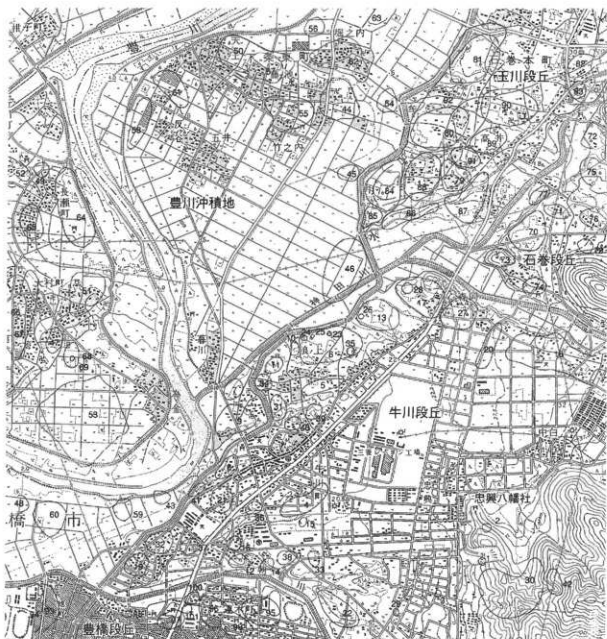
『豊橋市遺跡地図』および『市内遺跡詳細分布調査報告書』（註2）によれば、浪ノ上遺跡が所在する牛川段丘には、40カ所の遺跡が確認されている。一遺跡は、複数の時代にまたがる複合遺跡となるものが多いが、この遺跡を時代別にみると、旧石器時代遺跡1カ所、縄文時代遺跡11カ所、弥生時代遺跡15カ所、古墳時代遺跡19カ所（6古墳群を含む）、奈良時代遺跡13カ所、平安時代遺跡10カ所、中世遺跡22カ所、江戸時代遺跡21カ所である。

旧石器時代の遺跡は、中部洪積世上部に属するという「牛川人」で著名な牛川洞穴遺跡（1）のみであるが、木下克己氏の『愛知県八名郡の先史時代遺跡』（註3）によれば、この洞穴遺跡から程遠くない忠興遺跡（2）から有舌尖頭器、野川遺跡（3）から石核が採集されており、この牛川東部山麓一帯は、旧石器人のライフゾーンであったことを示唆している。

縄文時代の遺跡のうち、早期に属するものは、おいほて遺跡（4）、眼鏡下池北遺跡（5）、浪ノ上遺跡（6）E区のSB19の3遺跡があり、いずれからも押型文土器が出土している。3遺跡は、近くに湧水源のある、小さな流れに南面する日当たりのよい台地上に営まれていた点、共通している。縄文前期の土器は西側北遺跡（7）から出土し、中期の土器は洗島遺跡（8）から検出されている。いずれも台地の崖縁に近い古地である。西側遺跡（9、註4）は、縄文後期から晩期にかけての遺跡として知られ、浪ノ上遺跡、稲荷前遺跡（10）、熊野遺跡（11、註5）、南牛川A遺跡（12）からは縄文晩期末の土器が検出され、遺跡は豊川、神田川、朝倉川の沖積地に臨む台地の崖端部に展開されている。

弥生時代前期の土器は、西側北遺跡で確認されている。弥生時代中・後期には遺跡が増加し、浪ノ上遺跡・西側遺跡・中野遺跡（13、註6）、熊野遺跡などが、牛川段丘の西崖縁上に営まれた。牛川台地の南縁では、朝倉川沖積地に臨んで、西先原遺跡（14）、南牛川B遺跡（15）・南牛川D遺跡（16）等が、桜丘高等学校考古学研究会（註7）の調査によって明らかにされている。また三輪川沖積地に面する北部の段丘崖縁部には、狭間遺跡（17、註8）や西浦遺跡（18）がある。

古墳時代の遺跡は、浪ノ上遺跡（挿図第10・遺物観察表10）、西側遺跡、西先原遺跡、南台遺跡（19）、出口遺跡（20）、田ノ上遺跡（21）、西小鷹野遺跡（22）が知られている。



- | | | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|------------|-----------------|--------------|
| 1. 牛川河内遺跡 | 2. 忠興遺跡 | 3. 野川遺跡 | 4. おいほて遺跡 | 5. 飯橋下池北遺跡 | 6. 浪ノ上遺跡 | 7. 西衛北遺跡 |
| 8. 池島遺跡 | 9. 西衛遺跡 | 10. 稲荷前遺跡 | 11. 熊野遺跡 | 12. 南牛川A遺跡 | 13. 中野遺跡 | 14. 西光寺遺跡 |
| 15. 南牛川B遺跡 | 16. 南牛川C遺跡 | 17. 猿間遺跡 | 18. 西溝遺跡 | 19. 南台遺跡 | 20. 出口遺跡 | 21. 田ノ上遺跡 |
| 22. 西小瀬野遺跡 | 23. 浪ノ上1号墳 | 24. 稲荷山1号墳 | 25. 稲荷山2号墳 | 26. 中野古墳 | 27. 森岡古墳群 | 28. 秋間古墳群 |
| 29. 榎生塚古墳 | 30. 栗小路古墳群 | 31. 東衛遺跡 | 32. 栗原遺跡 | 33. もぐら沢遺跡 | 34. 西衛古基 | 35. 浪ノ上古墳敷地 |
| 36. 牛川北遺跡 | 37. 栗原寺遺跡 | 38. 東光寺遺跡 | 39. 中野遺跡 | 40. 中野西遺跡 | 41. 牛川段丘・牛川石炭坑址 | |
| 42. 栗小路石炭坑址 | 43. 牛川遺跡 | 44. 池尻遺跡 | 45. 沢渡遺跡 | 46. 桑原遺跡 | 47. 塩田遺跡 | 48. 長坂遺跡 |
| 49. 松ノ木田遺跡 | 50. 王西遺跡 | 51. 下河原遺跡 | 52. 郷西遺跡 | 53. 為河原郷遺跡 | 54. 谷口遺跡 | 55. 広間遺跡 |
| 56. 水戸口遺跡 | 57. 下条館址 | 58. 殿前遺跡 | 59. 水次遺跡 | 60. 宝塚遺跡 | 61. 東郷屋遺跡 | 62. 下条坂内古墳敷地 |
| 63. 赤ノ木遺跡 | 64. 上ノ坪遺跡 | 65. 宮井戸遺跡 | 66. 仲田遺跡 | 67. 狭小路遺跡 | 68. 菅原遺跡 | 69. 塩田1号塚 |
| 70. 神ノ谷遺跡 | 71. 多里塚遺跡 | 72. 白山II遺跡 | 73. 石神遺跡 | 74. 東郷屋遺跡 | 75. 青木I・II遺跡 | 76. 馬場遺跡 |
| 77. 辻川遺跡 | 78. 札辻遺跡 | 79. 大清水遺跡 | 80. 堂野遺跡 | 81. 城ノ内遺跡 | 82. 玉川史電所遺跡 | 83. 東野遺跡 |
| 84. 高井遺跡 | 85. 白石遺跡 | 86. 庄司ヶ下遺跡 | 87. 西砂原遺跡 | 88. 佐野遺跡 | 89. 東下地遺跡 | 90. 野添遺跡 |
| 91. 日向坂遺跡 | 92. 高井古墳群 | 93. 陸海遺跡 | 94. 吉田城址 | 95. 東田遺跡 | 96. 仁連木遺跡 | 97. 東郷遺跡 |
| 98. 東田古墳 | 99. 仁連木城址 | 100. 薮城址 | 101. 仁連木西遺跡 | | | |

挿図第4 浪ノ上遺跡周辺の遺跡 (1/71,000)

古墳は、前期に属する方墳として、浪ノ上1号墳(23,註9)稲荷山1号墳(24)、稲荷山2号墳(25)があり、いずれも神田川、豊川の沖積地に臨む段丘縁に築造されている。中期の古墳として石枕を出土した中野古墳(26)がある。三輪川が神田川へ合流するあたりには、森岡古墳群(27)12基と狭間古墳群(28)2基が存在している。森岡1号墳は方墳であり、注目される。朝倉川右岸には、相生塚古墳(29)があり、牛川東部丘陵には41基の後期の群集墳からなる乗小路古墳群(30)が築かれている。

奈良時代以降も、浪ノ上遺跡、東側遺跡(31)、西側遺跡、おいほて遺跡、熊野遺跡、西先原遺跡、薬師遺跡(32)に古代の集落の跡がみられる。

中世に至ると、もぐら沢遺跡(33)、西側古墓(34)、浪ノ上古屋敷址(35)、浪ノ上遺跡、狭間遺跡、西浦遺跡、熊野遺跡、西側遺跡、東側遺跡、洗島遺跡、おいほて遺跡、牛川北遺跡(36)、薬師遺跡、薬師寺遺跡(37)、南牛川A遺跡、東先原遺跡(38)、中郷遺跡(39,註10)、西側北遺跡、中郷西遺跡(40)、田ノ上遺跡、南台遺跡、西小鷹野遺跡があり、遺跡数が増加する。

近世の遺跡としては、中野遺跡、狭間遺跡、西浦遺跡、熊野遺跡、西側遺跡、東側遺跡、洗島遺跡、おいほて遺跡、牛川北遺跡、薬師遺跡、薬師寺遺跡、南牛川D遺跡、東先原遺跡、もぐら沢遺跡、中郷遺跡、中郷西遺跡、南台遺跡、西小鷹野遺跡があり、吉田藩の御用窯である牛川焼窯址・牛川石灰焼址(41,註11)、乗小路石灰焼址(42)8基、さらに豊川の堤防である牛川霞堤(43)があった。

牛川段丘における近世の村は、北に神ヶ谷村・金田村、西北に浪ノ上村、南部に牛川村があり、17世紀中期から、忠興、小鷹野、中沢、野川、田中の各新田が開かれる。

浪ノ上村は、土豪戸田氏を中心とする村で、1712(正徳2)年の村差出張(註12)によると、戸数22軒、人口203(男98・女105)人の小村である。幕末の1858(安政5)年、吉田藩戸口調(註13)によると、戸数24軒、人口110(男49・女61)人と人口は半減している。

1878(明治11)年、浪ノ上村は、付近の7ヵ村と合併し、牛川村となり、1906(明治39)年には、下条村と合併して下川村となり、1932(昭和7)年、豊橋市に合併し、今日に到っている。今回の豊橋牛川浪ノ上東部土地区画整理の対象となった、牛川町字西郷・字浪ノ上、石巻本町字峠と字中野の一部は地籍変更により浪ノ上町と改称し、字西郷の西部と字浪ノ上の南部(正円寺一帯)は土地区画整理事業の区域外であったので従来通り、牛川町字西郷・字浪ノ上と称している。

2、浪ノ上遺跡の北西－豊川下流沖積地東部の遺跡群

牛川段丘の北西から南西に及ぶ豊川下流域の沖積地の縄文時代遺跡としては、大村町の五貫森貝塚や大蚊里貝塚が有名であるが、下条東町の池尻遺跡(44)および沢渡遺跡(45)から縄文時代の突帯文土器が採集されている。

弥生時代の桑原遺跡(46)は、浪ノ上遺跡の北200mの沖積地にあって、瓜郷式土器が採集されている。大村町字善蔵・字勘太の塩田遺跡(47)は伊藤法一氏(註14)により昭和初年に瓜郷遺跡などと共に発見されている。牛川町の長畑遺跡(48)からは長床式土器が検出され、長瀬町の松ノ木田遺跡(49)もこの時代の遺物散布地である。

古墳時代から始まる下条東町の王西遺跡(50)、大村町の下河原遺跡(51)、郷西遺跡(52)、為河

原郷遺跡(53)は、古代・中世・近世まで続く歴代遺跡である。石巻本町の谷口遺跡(54)も沖積地にあり、同時期とされている。

奈良時代以降の遺跡として下条東町の広間遺跡(55)、木戸口遺跡(56)、下条館址(57)、下条西町の郷前遺跡(58)、牛川町の水洗遺跡(59)、宝塚遺跡(60)がある。下条西町の東郷廻遺跡(61)では平安時代の瓷器、中世の山茶碗、近世の陶器まで採集されている。

中世の遺跡としては、下条東町の下条館址・下条堀内古屋敷址(62)を中心に茶ノ木遺跡(63)、長瀬町上ノ畑遺跡(64)、宮井戸遺跡(65)、大村町の仲田遺跡(66)、袋小路遺跡(67)、善蔵遺跡(68)、塩田1号塚(69)などがあり、近世にまで連続するものが多い。

3、浪ノ上遺跡の北東-石巻段丘南西部の遺跡群

牛川段丘の北方から西縁を流れる神田川と、台地北縁を東から西に流れ、牛川段丘の北西端で神田川に合流する三輪川に挟まれた台地を石巻段丘とよぶ。この段丘の拠点集落である神ヶ谷遺跡(70、註15)は、東方石巻の山地を背に、西を神田川、南を三輪川、北を矢田川に囲まれた要害の地にあり、縄文時代から近世へと続く歴代集落で、江戸時代には、対岸の牛川段丘にまで広く進出している。縄文早期の押型文土器は、これより北東約1kmの向野遺跡から野口剛氏(註16)により発見されている。縄文後期の土器は多り畑遺跡(71、註17)からも出土している。

弥生時代には、神ヶ谷遺跡、白山Ⅱ遺跡(72、註18)、石神遺跡(73)、東屋敷遺跡(74)と集落は、中後期に広がる。古墳時代には、神ヶ谷遺跡・白山Ⅱ遺跡は前代から続き、多り畑遺跡はこの時期で終わり、青木Ⅰ・Ⅱ遺跡(75)が始まる。古代からは前記遺跡に、馬場遺跡(76)辻川遺跡(77)が加わり中世に至る。中世には、神ヶ谷、白山Ⅱ、青木Ⅰ・Ⅱ、馬場、石神、辻川の各遺跡に札辻遺跡(78)も合し、最も遺跡数が増加するが、近世には神ヶ谷、札辻、石神、辻川と範囲が縮小する。

4、浪ノ上遺跡の北-玉川段丘南部の遺跡群

玉川段丘は東から南へ流れる神田川により石巻段丘・牛川段丘と画され、北から西縁は、豊川沖積地に臨む段丘崖縁をなし、各時代を重複する多数の遺跡が密集している。

木下氏の前出書によれば、大清水遺跡(79)から旧石器時代とされる石核2個、削器1個が採集されており、縄文時代早期の押型文土器も発見されている。このすぐ北の萱野遺跡(80、註19)からも押型文土器が採集されているが、その立地するところは、牛川段丘の眼鏡下池北遺跡などと酷似している。縄文時代前期から中期・後期・晩期、弥生時代・古墳時代さらに歴史時代にまで及ぶ遺跡として、城ノ内遺跡(81、註20)がある。北は姫街道の通る沢により、南は信池の沢によって他と隔てられ西は豊川の沖積地の臨むという城ノ内遺跡の地形は、牛川段丘の中野遺跡や浪ノ上遺跡、稲荷前遺跡、西側遺跡の立地条件と共通している。神田川の右岸にあって、その沖積地に沿う台地に玉川変電所遺跡(82)があり、縄文時代中期から晩期に及ぶ遺跡である。また、西に接して、縄文時代後期から晩期に至る東野遺跡(83)が所在する。

大清水遺跡の西に接して高井遺跡(84)がある。高井遺跡(註21)は、縄文前期から近世に及ぶ歴代遺跡であり、弥生時代後期環濠集落の一部が確認されている。白石遺跡(85、註22)は、高井遺跡

南方の台地の突端にあり、縄文中期から晩期の拠点集落として発展し、弥生時代の前期の環濠集落が検出（註12）されている。庄司ヶ下遺跡（86、註23）は、弥生時代後期から古墳時代中期に及ぶ東西600m、南北60mの広い範囲の遺跡であった。神田川の右岸に沿い、大清水遺跡の南、庄司ヶ下遺跡の東に存した西砂原遺跡（87、註24）は、弥生中期から後期の土器に始まり古墳時代や奈良時代の須恵器、平安時代の瓦器が墨書土器と共に大量に採集（註12）されている。

古墳時代になると、弥生時代に栄えた、城ノ内遺跡、萱野遺跡、白石遺跡、大清水遺跡、庄司ヶ下遺跡、西砂原遺跡は、そのまま古墳時代に引き継がれる。古墳群は高井古墳群（92）41基があるが、その分布範囲は、南北1.3km以上もあり、群としてのまとまりを欠くので、これを小字別に再編すると、北から城ノ内（信池を含む）古墳群2基、中野口古墳群8基、日向坂古墳群11基、大清水古墳群12基、投野古墳群7基、白石古墳群1基となる。この中で注目されるのは、方墳の存在で、日向坂古墳群中に2基、大清水古墳群に3基、中野口古墳に2基、それぞれ確認されている。この方墳のあり方は、浪ノ上遺跡において浪ノ上1号墳、稲荷山1号墳、同2号墳という方墳が、古墳時代の初頭に出現した動向と無縁のものではなく、牛川、石巻地方の古墳出現期の一様相として把握されよう。日向坂1号墳（註25）は中期の古墳で、周濠から弥生後期の堅穴住居（91）が検出された。

奈良、平安時代になり、投野遺跡（88）、東下地遺跡（89）が知られ、上記の他の遺跡とともに、中世、近世まで営まれる。また野添遺跡（90）も、中・近世の集落址である。

5、牛川段丘の南－豊橋段丘北東部の遺跡群

豊橋段丘は、東から西に流れ豊川に注ぐ朝倉川によって、右岸の牛川段丘と画される。豊川、朝倉川の合流地点の左岸段丘上には、鮑海遺跡（93）、吉田城址（94、註26）がある。1977（昭和52）年の美術博物館建設工事に発見され実施された第1次調査以降、2005（平成17）までに24次の発掘調査が行われている。両遺跡はほとんど重複しているので、ここでは鮑海・吉田城遺跡とよぶ。1505（永正2）年築城以来、近代には陸軍の兵営として、また現在は、市庁舎、動物園、美術博物館等々の公共施設建設の僅な間隙に、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世、近代に至る各時期の遺構や遺物が、からくも残存している。

市営の競輪場や駐車場の工事により弥生時代の長床式土器を伴う住居址がみつかった東田遺跡（92、註27）を始めとして、朝倉川左岸には、弥生時代の遺跡として、仁連木遺跡（93）、東郷遺跡（94）がある。

古墳時代には、鳥文鏡や埴輪を出土した、全長40m、高さ3mの前方後円墳である東田古墳（96）がつくられた。吉田城の調査では、埴輪や銅鐙が出土しているので、築城以前には、台地の一角に古墳がつくられていたとも考えられる。

古代には、鮑海・吉田城遺跡に遺構が多く残り、中世には、今橋城（吉田城の前身）、仁連木城（99）、臺城址（100）が築城され、その周辺に鮑海・吉田城遺跡、仁連木遺跡、仁連木西遺跡（101）、東田遺跡が営まれる。牧野、戸田、松平、今川の激しい争奪戦の中で、吉田城は東三河地方の要衝となり、城近隣の浪ノ上や牛川などの郷村は、その支配下におかれていくのである。

- 註1 木下克己他「浪ノ上遺跡範囲確認調査」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集』豊橋市教育委員会 1982
- 註2 『豊橋市遺跡地図』豊橋市教育委員会 2004
『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第78集 市内遺跡詳細分布調査報告書』豊橋市教育委員会 2004
- 註3 木下克己『愛知県八名郡の先史時代遺跡』石巻地区文化財保存会 1975
- 註4 小林久彦『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第84集 西側遺跡(Ⅱ)』豊橋市教育委員会 2006
岩瀬彰利他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第89集 西側遺跡(Ⅲ)』豊橋市教育委員会 2007
- 註5 小林久彦他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第23集 熊野遺跡』豊橋市教育委員会 1995
- 註6 芳賀 陽他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第60集 中野遺跡・東郷内1号宮・西上遺跡・野添遺跡』豊橋市教育委員会 2001
- 註7 桜丘高等学校考古学研究会『愛知県豊橋市朝倉川流域遺跡分布調査(第1次概報)』1979
桜丘高等学校考古学研究会『西先原遺跡発掘調査概報』1981
- 註8 北村和宏他『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集 森岡遺跡 淡洲神社北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1991
- 註9 伊藤 恵『浪ノ上第1号墳調査概報』豊橋市教育委員会 1983
- 註10 岩瀬彰利『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第90集 中郷遺跡』豊橋市教育委員会 2007
- 註11 豊橋市牛川町洗島 後藤藤治郎氏の御教示による
- 註12 豊橋市史編集委員会『豊橋市史第7巻』1978
- 註13 豊橋市史編集委員会『豊橋市史第2巻』1975
- 註14 伊藤法一『豊川下流の上郷と下郷』1935
- 註15 森田勝三・住吉政浩『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第70集 日向坂1号墳・神ヶ谷遺跡』豊橋市教育委員会 2002
- 註16 野口 剛氏は、木下克己氏と共に旧八名郡の遺跡調査の中心となり遺跡の保護活動も積極的に行っている。
- 註17 賛 元洋他『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集 石巻神郷地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』豊橋市教育委員会 1986
- 註18 賛元洋・岩原剛他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第72集 白山Ⅰ・Ⅱ遺跡他』豊橋市教育委員会 2003
- 註19 註6と同書
- 註20 註3と同書 註2の文献では、高井城址として扱っている。
- 註21 註2の文献でいう高井遺跡は、その殆んどが豊橋市下条東町字白石の地籍に属する。
賛 元洋他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第26集 高井遺跡』豊橋市教育委員会 1996
森下倫代『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第57集 高井遺跡(Ⅱ)』豊橋市教育委員会(株)イビソク 2001
- 註22 註2の文献でいう白石遺跡は、そのすべてが豊橋市石巻本町字榎割の地籍に属する。
賛元洋他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第15集 白石遺跡』豊橋市教育委員会 1993
- 註23 註3と同書
- 註24 註6と同書
- 註25 註15と同書

- 註26 賛元洋・小林久彦・岩瀬彰利・岩原剛 『古田城址（Ⅰ）～（Ⅹ）』 豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会 1994
～2007
- 註27 岩瀬彰利 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第25集 東田遺跡』 豊橋市教育委員会 1995
- 岩瀬彰利他 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第32集 百々池B古窯・東田遺跡（Ⅱ）』 豊橋市教育委員会
1996
- 豊橋市史編纂委員会 『豊橋史紀要』 1954 豊橋市役所

参考文献

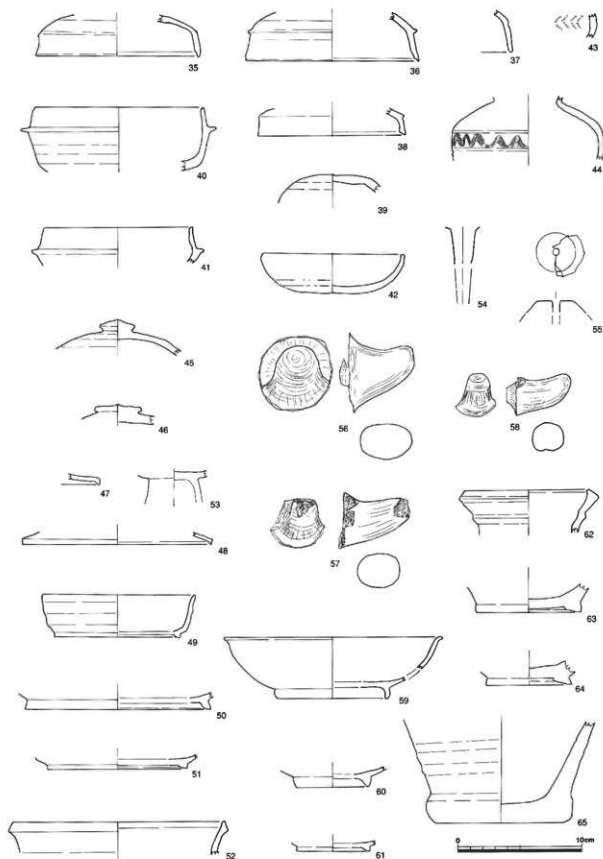
- 石川一美 『伊辺閑話』 三遠文化協会 1976
- 石川一美 『写真集 ふるさと牛川』 豊橋市牛川文化協会 1981
- 加納俊介他 『牛川西部・大岩南地区土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財分布調査報告書』 牛川西部・大岩南地区遺跡分布調査団、豊橋市教育委員会 1989
- 小林久彦 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第12集 牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告書』 豊橋市教育委員会
1991
- 『牛川文化協会二十周年記念誌』 牛川文化協会 1985
- 『牛川郷土資料室の栞』 牛川文化協会 1987

浪ノ上周辺遺跡の遺物について

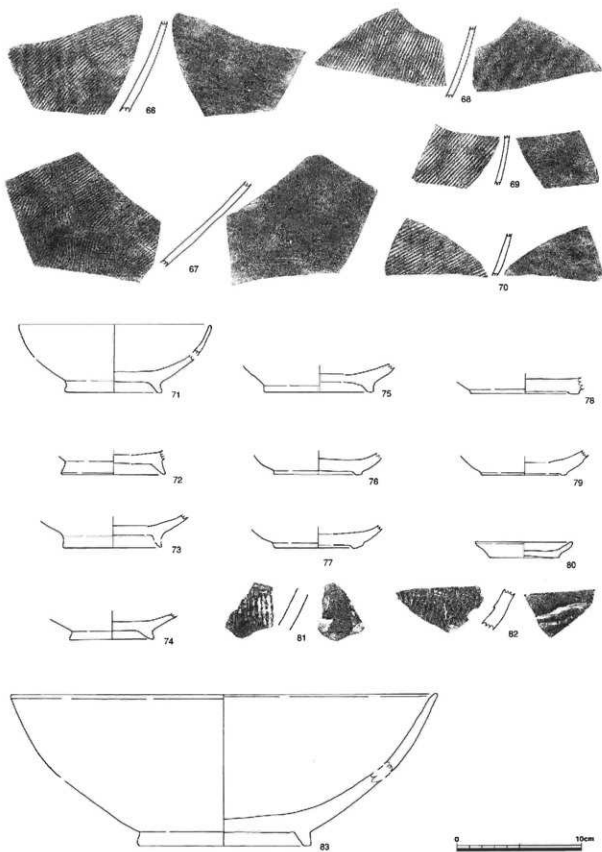
- ・牛川校区市民館所蔵の戸田時一郎氏と石居茂夫氏の採集遺物の実測に際しては、牛川文化協会会長の林みな子氏、同協会郷土史部長の後藤謙治郎氏の多大なご助力に深く感謝いたします。
- ・石巻・牛川地区の資料は、昭和40年代から50年代にかけて行われた農地改良事業や区画整理事業に伴う遺跡の破壊の場を木下克己氏や野口剛氏とパトロール中採集したもので、主なものは、木下氏の『愛知県八名郡の先史時代遺跡』の資料として提供した。
- ・段丘古墳・向坪古墳の遺物は、古墳分布調査中、地主の方から提供されたものである。
- ・吉田城の資料は、昭和52年、豊橋美術博物館建設工事中、遺跡を発見したとき、表採した遺物である。
- ・仁連木遺跡の資料は、小畑頼孝氏から実測図の提供があり深く感謝いたします。



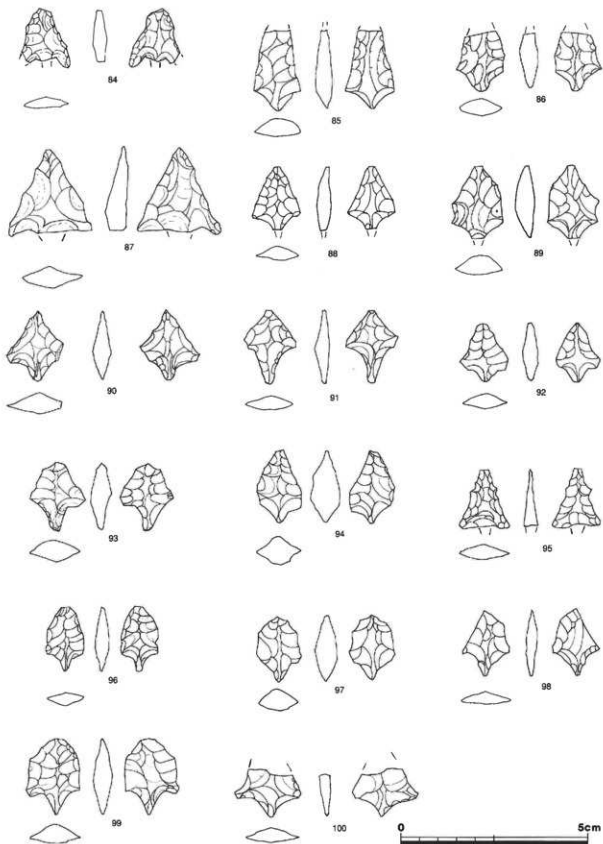
挿図第5 豊橋市石巻本町字櫃割表採遺物(1)



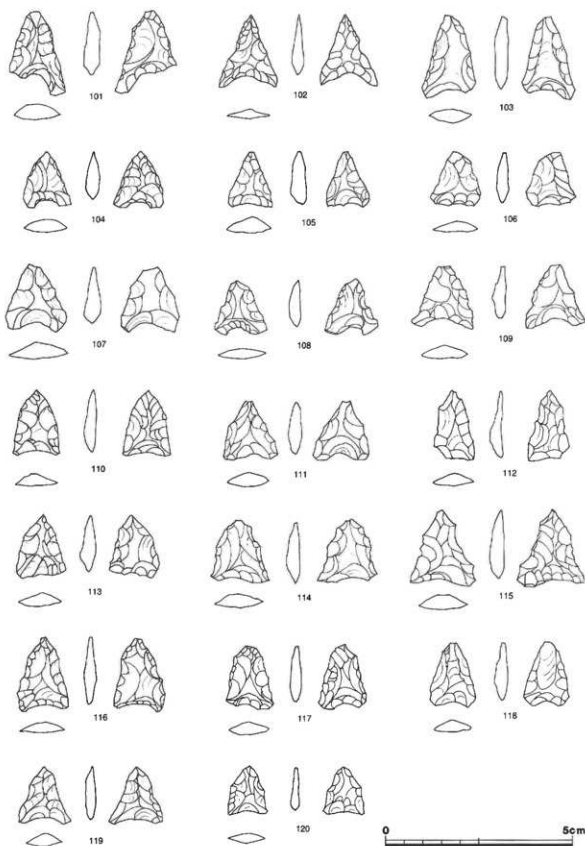
挿図第6 豊橋市石巻本町字檀割表採遺物(2)



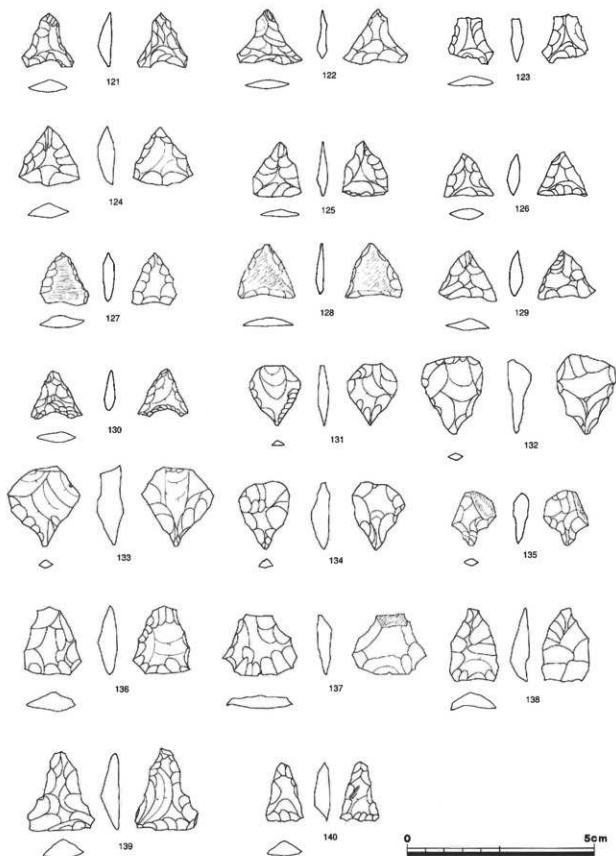
挿図第7 豊橋市石巻本町字権割表採遺物（3）



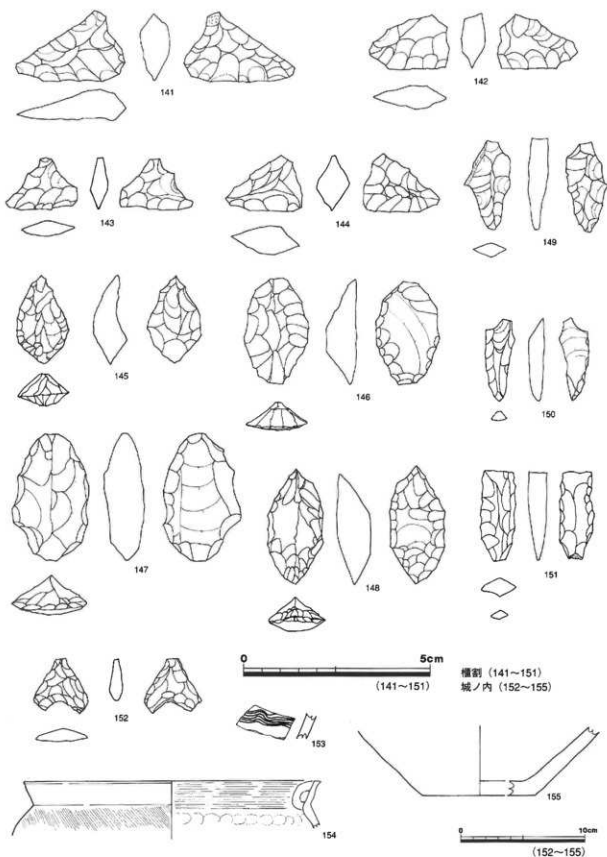
挿図第8 豊橋市石巻本町字權割表採遺物（4）



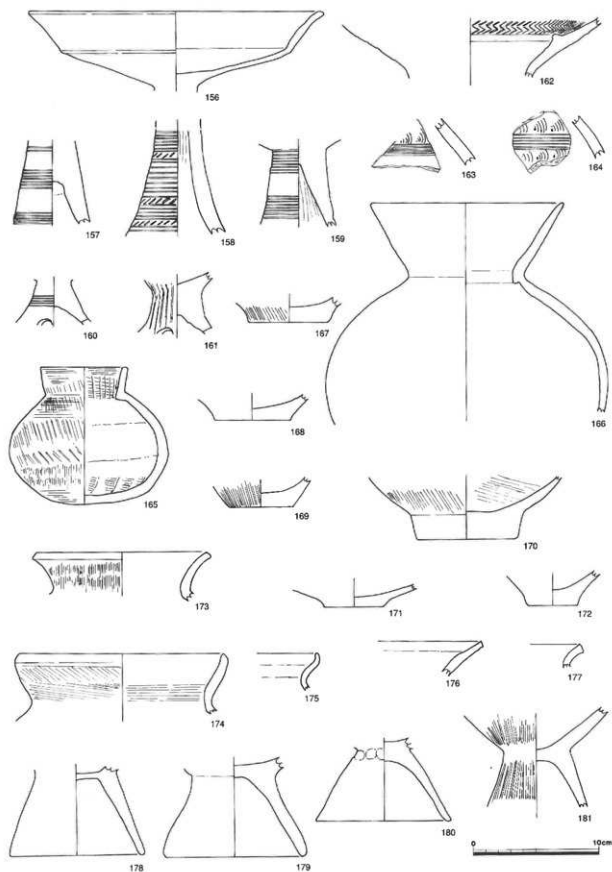
挿図第9 豊橋市石巻本町字樫割表採遺物(5)



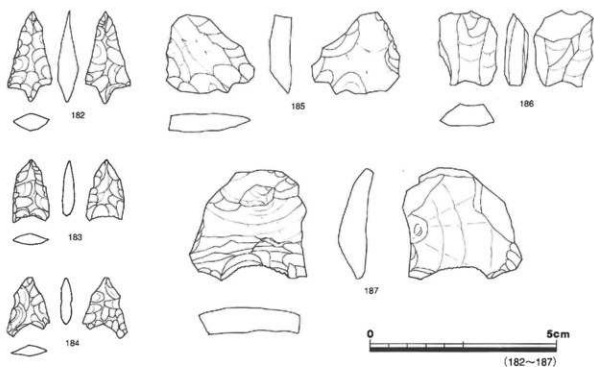
挿図第10 豊橋市石巻本町字樫割表採遺物（6）



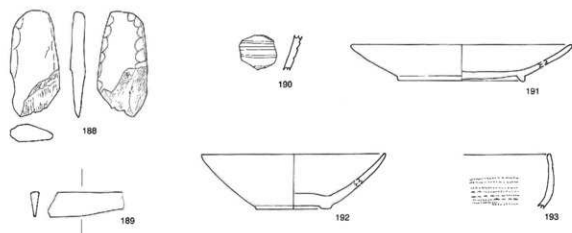
挿図第11 豊橋市石巻本町字櫛割表採遺物（7）及び同町字城の内表採遺物



挿図第12 豊橋市中野遺跡表採遺物

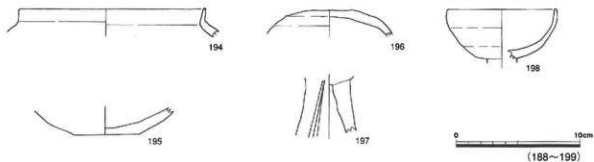


東野遺跡 (182~193)

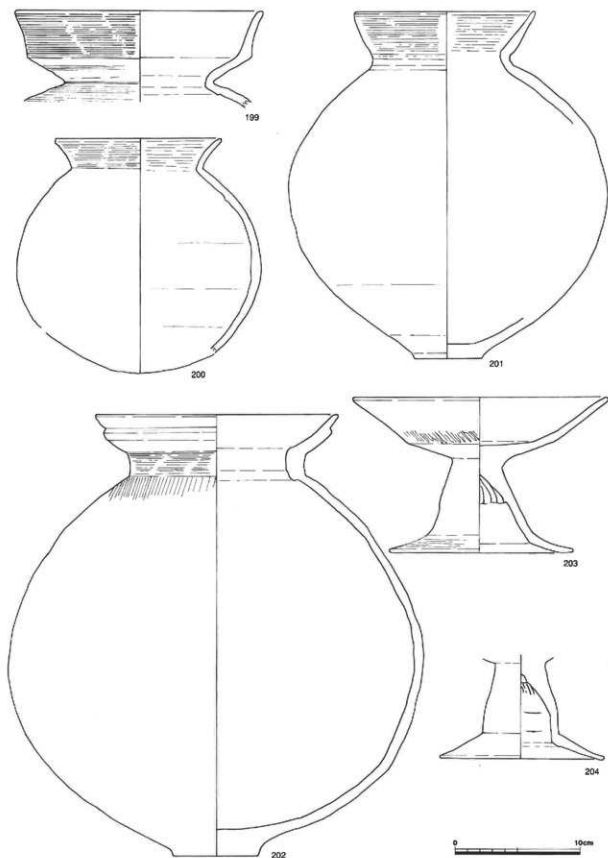


段塚古墳 (194~197)

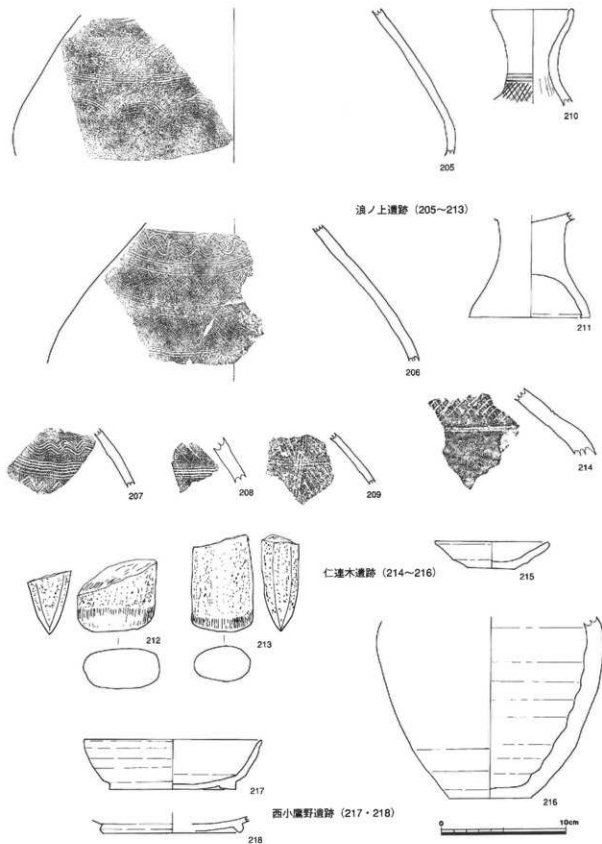
向坪古墳 (198)



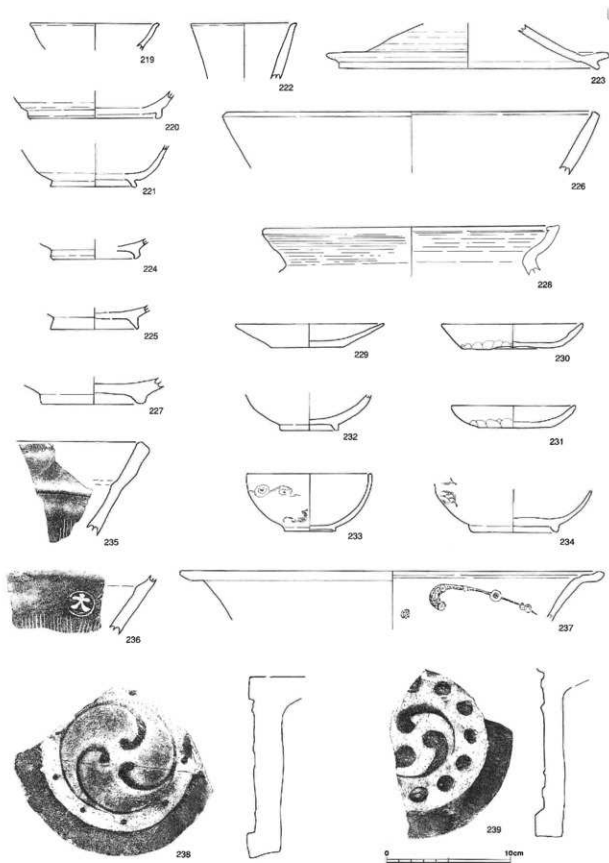
挿図第13 豊橋市東野遺跡、段塚古墳、向坪古墳表採遺物



挿図第14 豊橋市稲荷前遺跡採集遺物



挿図第15 豊橋市稲荷前遺跡、浪ノ上遺跡、仁連木遺跡、西小鷹野遺跡採集遺物



挿図第16 豊橋市吉田城址表採遺物

表1 豊橋市石巻本町字横割表探遺物観察表

番号	部 位	部 位	法量(単位cm)	時 期
1	深井	口縁部		縄文晩前期
2	深井	口縁部		縄文晩前期
3	深井	口縁部		縄文晩前期
4	浅井	口縁部		縄文晩期中葉
5	深井	口縁部	口径 14.0	縄文晩期中葉
6	深井	口縁部		縄文晩期中葉
7	深井	口縁部		縄文晩期末
8	深井	口縁部		縄文晩期
9	深井	口縁部		縄文晩期末
10	深井	口縁部		縄文晩期末
11	深井	口縁部		弥生前期
12	深井	口縁部		弥生前期
13	深井	胴部		弥生前期
14	深井	胴部		弥生前期
15	深井	胴部		弥生前期
16	深井	胴部		弥生前期
17	深井	胴部		弥生前期
18	深井	胴部		弥生前期
19	深井	胴部		弥生前期
20	深井	胴部		弥生前期
21	深井	底面	底径 6.8	弥生前期
22	深井	底面	底径 5.8	弥生前期
23	深井	底面	底径 9.0	弥生前期

番号	部 位	部 位	法量	幅	厚さ	岩石名
24	打製石斧	片縁部		2.5	1.5	珸瑯性岩?
25	打製石斧	柄部		4.2	1.2	珸瑯性岩?
26	打製石斧	先端	7.6	5.3	1.5	砂安(81.2g)
27	石錐	先端		1.5		珸瑯性岩?
28	磨製石斧	柄部		3.5	1.9	珸瑯性岩?
29	磨製石斧	柄部		4.2	2.9	珸瑯性岩?
30	磨製石斧	柄部		6.1	3.7	珸瑯性岩?
31	磨製石斧	柄部		3.2	1.6	珸瑯性岩?
32	磨製石斧	柄部		4.2	2.6	珸瑯性岩?
33	磨製石斧	刃部				珸瑯性岩?
34	磨製石斧	刃部		4.5	2.5	珸瑯性岩?

番号	器 種	口径	底径	器高	型 式
35	須恵器 甕	13.0			第3型式
36	須恵器 甕	14.0		4.5	第2型式
37	須恵器 甕				第4型式
38	須恵器 甕	12.0			第3型式
39	須恵器 甕				第5型式
40	須恵器 甕	13.6	7.0	5.3	第1型式
41	須恵器 甕	12.0			第4型式
42	須恵器 甕	11.6	4.6	3.2	第5型式
43	須恵器 甕				
44	須恵器 甕	例伴12.4			
45	須恵器 甕				第1期
46	須恵器 甕				第1期
47	須恵器 甕				第2期
48	須恵器 甕	15.2			第2期
49	須恵器 甕	12.2	10.0	3.5	第2期
50	須恵器 甕		15.0		第2期
51	須恵器 甕		11.2		第2期
52	須恵器 甕	17.0			
53	須恵器 甕				
54	須恵器 甕	11.2			
55	須恵器 甕				
56	石製鉢鉢		上面径 3.2 孔徑 0.6		珸瑯性岩
57	土師器 甕				
58	土師器 甕				
59	土師器 甕				
60	須恵器 甕	17.6	9.2 (5.0)		第2型式
61	須恵器 甕		6.0		第2型式
62	須恵器 甕		6.0		第2型式
63	須恵器 甕		8.6		第2型式
64	須恵器 甕		7.0		
65	須恵器 甕		11.6		

番号	器 種	口径	底径	器高	型 式
66	須恵器 甕				
67	須恵器 甕				
68	須恵器 甕				
69	須恵器 甕				
70	須恵器 甕				
71	行基焼 甕	(15.5)	7.8	(5.5)	第1型式古
72	行基焼 甕		8.4		第1型式古
73	行基焼 甕		8.1		第1型式古
74	行基焼 甕		6.8		第2型式古
75	行基焼 甕		3.0		第2型式古
76	行基焼 甕		7.2		第2型式古
77	行基焼 甕		7.4		第2型式古
78	行基焼 甕		8.8		第2型式古
79	行基焼 甕		7.0		第2型式古
80	行基焼 小甕	8.0	5.6	1.3	第2型式古
81	行基焼 甕				
82	行基焼 甕				
83	行基焼 甕	23.0			第2型式古

(底径の単位:g)

番号	器 種	口径	底径	器高	型 式	岩石名
84	巴系有蓋甕	1.6	1.1	0.4	0.8	黒曜石
85	巴系有蓋甕	2.2	1.2	0.5	1.4	松脂岩
86	巴系有蓋甕	1.6	1.2	0.5	1.2	チャート
87	巴系有蓋甕	2.3	2.3	0.6	2.3	チャート
88	巴系有蓋甕	1.7	1.3	0.4	0.9	チャート
89	巴系有蓋甕	2.0	1.1	0.5	1.6	チャート
90	巴系有蓋甕	1.9	1.5	0.5	1.2	チャート
91	巴系有蓋甕	2.2	1.4	0.4	1.0	安山岩
92	巴系有蓋甕	1.6	1.2	0.4	0.8	安山岩
93	巴系有蓋甕	1.9	1.5	0.6	1.2	チャート
94	巴系有蓋甕	1.9	1.1	0.8	1.9	チャート
95	門系有蓋甕	1.8	1.3	0.4	0.6	安山岩
96	巴系有蓋甕	1.7	1.0	0.4	0.8	チャート
97	巴系有蓋甕	1.8	1.1	0.6	1.2	チャート
98	巴系有蓋甕	1.8	1.2	0.3	0.8	チャート
99	巴系有蓋甕	2.1	1.5	0.3	1.4	チャート
100	巴系有蓋甕	1.3	1.8	0.3	0.8	松脂岩
101	門系有蓋甕	2.3	1.8	0.4	1.2	安山岩
102	門系有蓋甕	2.0	1.6	0.3	0.7	安山岩
103	門系有蓋甕	2.3	1.4	0.4	1.3	安山岩
104	巴系有蓋甕	1.5	1.3	0.4	0.7	安山岩
105	巴系有蓋甕	1.5	1.2	0.4	0.7	安山岩
106	巴系有蓋甕	1.4	1.4	0.4	0.7	安山岩
107	巴系有蓋甕	1.8	1.7	0.4	1.1	安山岩
108	巴系有蓋甕	1.5	1.4	0.4	0.5	安山岩
109	巴系有蓋甕	1.8	1.6	0.4	0.9	安山岩
110	巴系有蓋甕	1.8	1.3	0.4	0.8	安山岩
111	巴系有蓋甕	1.6	1.5	0.4	0.8	安山岩
112	巴系有蓋甕	1.4	1.2	0.4	0.7	安山岩
113	門系有蓋甕	1.7	1.4	0.4	0.9	チャート
114	門系有蓋甕	1.7	1.7	0.4	0.9	安山岩
115	巴系有蓋甕	2.1	1.8	0.4	1.2	安山岩
116	巴系有蓋甕	2.0	1.4	0.3	1.0	安山岩
117	巴系有蓋甕	1.8	1.2	0.3	0.7	安山岩
118	門系有蓋甕	1.8	1.2	0.4	0.7	チャート
119	門系有蓋甕	1.6	1.5	0.3	0.7	チャート
120	門系有蓋甕	1.3	1.1	0.3	0.4	安山岩
121	門系有蓋甕	1.5	1.4	0.4	0.5	松脂岩
122	門系有蓋甕	1.5	1.8	0.3	0.4	安山岩
123	門系有蓋甕	1.3	1.2	0.3	0.4	安山岩
124	平蓋有蓋甕	1.6	1.6	0.4	1.0	チャート
125	平蓋有蓋甕	1.3	1.6	0.3	0.6	チャート
126	平蓋有蓋甕	1.2	1.4	0.3	0.4	安山岩
127	巴系有蓋甕	1.5	1.3	0.3	0.5	安山岩
128	巴系有蓋甕	1.5	1.6	0.2	0.5	安山岩
129	巴系有蓋甕	1.2	1.7	0.3	0.5	安山岩
130	門系有蓋甕	1.3	1.4	0.3	0.4	安山岩
131	右衛門	1.7	1.4	0.3	0.8	安山岩
132	右衛門	2.2	1.6	0.7	1.7	安山岩
133	右衛門	2.2	1.9	0.7	3.3	チャート

134	石礎	19	1.4	0.5	1.3	安山岩
135	石礎	15	1.2	0.4	0.6	安山岩
136	石礎	18	1.5	0.5	1.6	安山岩
137	石礎	17	2.0	0.4	1.7	チャート
138	石礎	20	1.3	0.5	1.3	松脂岩
139	石礎	22	1.7	0.5	1.6	安山岩
140	石礎	16	1.0	0.4	0.6	安山岩
141	石礎	19	3.0	0.8	3.9	安山岩
142	石礎	15	2.1	0.6	2.1	安山岩
143	石礎	15	2.0	0.5	1.3	安山岩
144	石礎	15	2.0	0.9	2.3	チャート
145	横跡	24	1.4	0.8	2.6	チャート
146	横跡	28	1.8	0.8	4.0	安山岩
147	横跡	35	2.1	1.1	6.9	安山岩
148	横跡	32	1.5	0.9	4.1	安山岩
149	不明石礎	25	1.1	0.5	1.3	チャート
150	不明石礎	23	0.8	0.5	0.8	チャート
151	不明石礎	28	1.0	0.5	1.7	安山岩

表2 豊橋市石巻本町字城ノ内表採遺物観察表

番号	部	種	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
152	西基無蓋		1.5	1.5	0.8		チャート
153	先生土器	皿	破砕文				
154	〇の字内耳筒	口徑	24.0	内一横ハケ指痕		外一ハケ	
155	行基焼	鉢	直径	9.0			

表3 豊橋市中野遺跡表採遺物観察表

番号	部	種	口徑	底径	器高	備考
156	弥生土器	高杯	23.6			坏部 後期前半
157	弥生土器	高杯				坏部 後期前半
158	弥生土器	高杯				坏部 後期前半
159	弥生土器	高杯				坏部 後期前半
160	弥生土器	高杯				坏部 後期後半
161	弥生土器	高杯				坏部 後期後半
162	弥生土器	甕				口部 後期前半
163	弥生土器	甕				胴部 後期前半
164	弥生土器	甕				坏部 後期前半
165	土師器	甕	6.9 (丸底)		11.3	
166	土師器	甕	15.6			
167	土師器	甕		6.6		
168	土師器	甕		6.0		
169	土師器	甕		5.2		
170	土師器	甕		7.9		
171	土師器	甕		4.8		
172	土師器	甕		4.0		
173	土師器	甕	13.6			
174	土師器	甕	10.4			
175	土師器	甕				
176	土師器	甕				
177	土師器	甕				
178	土師器	かわらけ		10.6		
179	土師器	甕	(11.0)			
180	土師器	甕		10.8		
181	土師器	甕		(8.4)		

表4 豊橋市東野遺跡表採遺物観察表

番号	部	種	長さ	幅	厚さ	重さ	岩石等
182	円蓋有蓋		2.5	1.2	0.4	1.2	チャート
183	西基無蓋		1.7	1.0	0.3	0.6	チャート
184	西基無蓋		1.7	1.2	0.3	0.5	チャート
185	石礎		2.2	2.4	0.5	4.2	チャート
186	石礎		2.1	1.5	0.7	2.9	チャート
187	横跡		3.0	3.2	0.7	9.2	チャート
188	壺形石片		8.6	4.0	1.2	53.6	塩基性岩
189	石刀			2.0	0.8	8.9	塩基性岩
190	縄文土器						(晩期)
191	平安朝茶碗		16.2				(第2型式)
192	行基焼	碗	6.2				(第3型式)
193	行基焼	碗					(江戸中期)

表5 豊橋市段塚古墳・向坪古墳表採遺物観察表

番号	部	種	口徑	底径	器高	備考
194	埴輪		16.0			段塚古墳
195	甕					段塚古墳
196	甕					段塚古墳
197	高杯					段塚古墳
198	高杯		9.0			向坪古墳

表6 豊橋市稲荷前遺跡採遺物観察表

番号	部	種	口徑	底径	器高	備考
199	土師器	甕	20.0			
200	土師器	甕	13.4 (丸底)		(19.2)	
201	土師器	甕	14.6	5.5	29.5	戸田時一郎氏採集
202	土師器	甕	19.6	7.0	36.0	牛川辰市氏採集
203	土師器	高杯	20.6	15.0	12.8	
204	土師器	高杯		13.2		

表7 豊橋市稲荷前遺跡、浪ノ上遺跡、仁達木遺跡、西小嵐野遺跡採遺物観察表

番号	部	種	口徑	底径	器高	遺跡名・採集者
205	弥生土器	甕	6.6			稲荷前遺跡 戸田時一郎氏
206	弥生土器	甕		9.7		
207	弥生土器	甕				
208	弥生土器	甕				
209	弥生土器	甕				浪ノ上遺跡 石井茂夫氏
210	弥生土器	甕				
211	弥生土器	甕				
212	壺形石片		縦 6.3 厚さ 3.7			浪ノ上遺跡 戸田時一郎氏
213	壺形石片		縦 5.0 厚さ 3.0			
214	弥生土器	甕				
215	行基焼	小皿	9.2	4.9	2.2	仁達木遺跡 小畑敏孝氏
216	行基焼	甕		6.6		
217	須恵焼	坏	14.3	10.0	4.1	西小嵐野遺跡
218	須恵焼	坏		11.0		

表8 豊橋市吉田城址表採遺物観察表

番号	部	種	口徑	底径	器高	備考
219	須恵焼	坏	10.3			奈良朝須恵器
220	須恵焼	坏		10.2		奈良朝須恵器
221	須恵焼	坏		6.8		奈良朝須恵器
222	須恵焼	平瓶	8.6			奈良朝須恵器
223	須恵焼	甕	21.0			奈良朝須恵器
224	須恵焼	甕		6.5		
225	須恵焼	甕		7.0		
226	須恵焼	鉢	30.4			
227	行基焼	甕		7.8		
228	新通門跡		28.0			
229	土師器	小皿	12.0	5.6	2.1	
230	土師器	かわらけ	11.4	7.4	2.0	外堀内堀間に存在
231	土師器	かわらけ	10.0	5.6	1.8	外堀内堀間に存在
232	瀬戸焼	甕		4.7		鎌倉朝
233	瀬戸焼	甕	10.0	4.0	4.8	鎌倉朝
234	瀬戸焼	小鉢		6.4		三足鉢
235	瀬戸焼	大鉢				
236	瀬戸焼	備前				
237	瀬戸焼	備前				口縁内面に金が2個
238	瓦		径 約16.2			丸に三つ巴瓦
239	瓦		径 約16.0			丸に三つ巴瓦

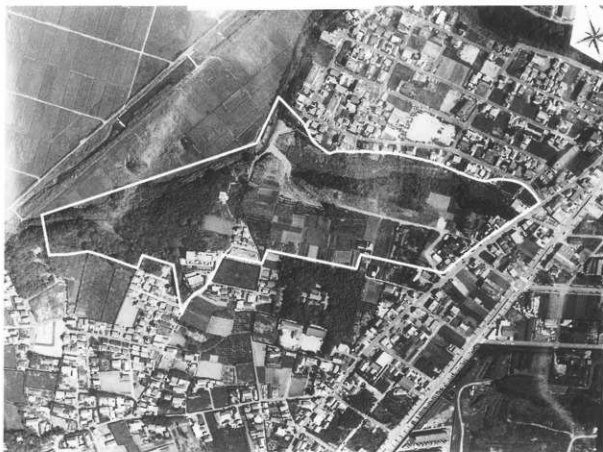
第2章 調査の経過

第1節 本調査に至るまでの経緯

昭和25（1950）年2月14日～3月23日、牛川町の青年団「さざなみ会」の人たちによって浪ノ上1号墳（註1）が発掘された。昭和31（1956）年4月には、牛川町の郷土史『牛川史』（註2）が牛川地方郷土史研究会の手によって刊行された。その中の「牛川誌年表」には石川一美氏をはじめとする研究会会員の調査の成果が記載されており、遺跡や遺物散布地が明らかにされている。

中野・浪ノ上・西郷地区は標高20m程の支丘になっており、北側は豊川や神田川の流れる沖積低地で、支丘の周辺は雑木林が取り巻いていた。そして浪ノ上の支丘と中野の支丘は「おもどろの沢」により南と北に分けられていた（註3）。

昭和46（1971）年には、中野土地区画整理組合が設立され、中野土地区画整理事業が始まった。豊橋市教育委員会から依頼を受けた芳賀陽氏（日本考古学協会会員）は、区画整理区域内に幅1m、南北10mのトレンチを入れ調査した。その結果、竪穴住居址1軒と土壌4基、炉址2箇所が検出され、多くの土器や石器が出土した。遺構の存在が確認されたにもかかわらず本調査は行われることなく区



挿図第17 浪ノ上遺跡の範囲（白線で囲んだ部分）

画整理事業は終了した(註4)。昭和52(1977)年には、浪ノ上地区や西郷地区の地権者によって区画整理事業に向けての取り組み(註5)がなされるようになった。

昭和46年に石巻地区在住の木下克己、野口剛の両氏を中心にして「石巻地区文化財保存会」(会長菅沼義見)が結成された。当会では遺跡分布調査と保存運動を進め、そのことにより埋蔵文化財に対する関心も高まり豊橋市教育委員会への働きかけも強まった。文化財の保護と保全に万全を図るために豊橋市教育委員会ならびにその他の関係機関の働きにより、遺構の有無ならびにその範囲を知るための浪ノ上遺跡所在確認調査が行われることになった(註6)。

発掘調査の契約は、昭和54(1979)年9月13日「54豊教文美第28号」により、豊橋牛川浪ノ上区画整理組合設立準備委員会と石巻地区文化財保存会代表木下克己氏(日本考古学協会会員)との間で結ばれた。昭和54(1979)年9月から昭和55(1980)年3月までに区画整理対象面積96,001㎡の区域内に10か所のトレンチを設定して遺跡の所在確認調査が行われた。

昭和55(1980)年4月に豊橋市教育委員会市民文化課ならびに教育長、浪ノ上区画整理組合設立準備委員会に報告書が提出された。それによると縮尺1000分の1の地図に所在調査地点の土地所有者、住所、現況、遺構の有無、出土遺物を表にまとめた上で、「最も遺跡の出る可能性が強い範囲をA地区(以後、木下A地区とする)、遺跡になる可能性がかなりある範囲をB地区(以後、木下B地区とする)、工事をする時一応注意したい所をC地区(以後、木下C地区とする)」とまとめている。そして、「柱穴、堀(溝)などが少しでも発見された箇所は全体の半数以上に及び、この試験箇所は、さらに発掘面積を拡大すれば、住居址やその他の遺構になる可能性が強い」「中野遺跡と沢を距てて相対するB地区

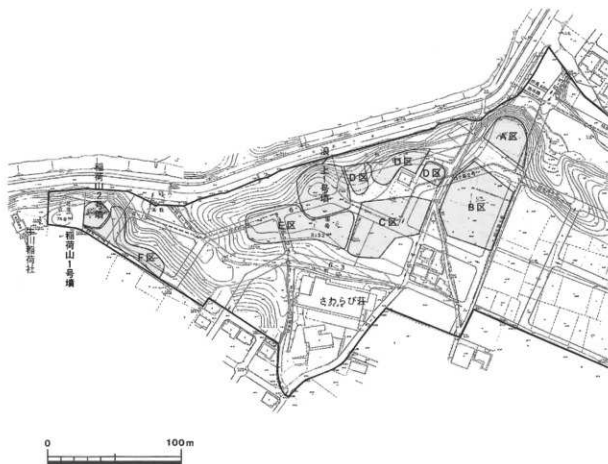


地点	所在地	地点	所在地
第1地点	豊橋市牛川町字西郷103の3	第11地点	豊橋市牛川町字浪ノ上15の75
第2地点	豊橋市牛川町字西郷106の1	第12地点	豊橋市牛川町字浪ノ上15の71
第6地点	豊橋市牛川町字西郷106の5	第13地点	豊橋市牛川町字浪ノ上15の57
第8地点	豊橋市牛川町字浪ノ上23の3	第14地点	豊橋市牛川町字浪ノ上15の38
第9地点	豊橋市牛川町字浪ノ上23の6	第15地点	豊橋市牛川町字浪ノ上15の109

挿図第18 1979年度の範囲確認調査地点(『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』より転載)



挿図第19 豊橋市牛川町字浪ノ上・字西郷地区の新(下)旧(上)地籍図



挿図第20 浪ノ上遺跡の各調査区

ではA地区に近いほど遺物の量は多く、東にいくほど遺物の量は少ない。しかし、北の沢に近い所は、東でも遺物も多く、また、北の沢に近い箇所では、溝などや有機土層の存在が見られ、要注意区域である」とし、「区画整理工事前に実施すべき調査、工事中に注意すべき箇所などをふまえて、貴重な埋蔵文化財の保護、保存に配慮されることを念願したい。」(註7)と結んでいる。

昭和55(1980)年9月1日から9月26日にかけて三菱レイヨン株式会社送水管施設移設工事に伴う発掘調査が行われた。調査主任は石巻地区文化財保存会代表木下克己氏(日本考古学協会会員)である(註8)。その後、木下氏は体調を崩され、その年の暮れに帰らぬ人となった。

浪ノ上区画整理事業は、設立準備委員会を浪ノ上東部土地区画整理組合として新たに発足した。区画整理事業の進展に伴い、発掘調査は浪ノ上東部土地区画整理組合から豊橋市教育委員会市民文化課を通し、豊橋遺跡調査会代表芳賀陽(日本考古学協会会員)へ委託された。発掘は豊橋遺跡調査会の住吉政浩(日本考古学協会会員)が担当することになった。

昭和56(1981)年5月30日、浪ノ上東部土地区画整理事業に伴う発掘調査の打ち合わせ会が開催された。区画整理組合からは発掘調査は組合が指定した期間内で完成させ、計上した予算の範囲内で実施する。教育委員会市民文化課からは本日の話し合いは本年度の調査区A区のみとし(註9)、具体的なことは後日話し合う。豊橋遺跡調査会からは盛土の削平、表土の削平の機械の貸与とオペレーター派遣、発掘調査を期間内にスムーズに行えるよう作業員の派遣の協力、などの要望が出された。し

かしながら緊急の打ち合わせということで、契約書の締結はなされなかった。

註1 さざなみ会 「浪ノ上遺跡発掘日誌」『いづみ』牛川青年団 1950

「吾々、さざなみ会は昭和24年度最後の事業として郷土文化研究の為、古くから村人達に云ひ伝えられている浪ノ上十二塚を発掘する事に決定した。まづ十二塚の内の塚で、正円寺墓地（サンマイショ）の北隣のこんもりとふくれ上がった塚・・・（略）・・・この塚は吾々が今迄に学んだ事の無い形状で、十二塚中一番大きい為比れを最初に発掘すべく議決し、」

註2 石川一美 『牛川誌』三遠文化協会 1956

註3 石川一美 『古希記念 炉辺閑話』三遠文化協会 1976

註4 芳賀 陽 『中野遺跡』『豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第60集 中野遺跡 東郷内1号室 西上遺跡 伊奈遺跡 野添遺跡』豊橋市教育委員会 2001

註5 篠田 進 『自叙伝』1990

註6 木下克己 「浪ノ上遺跡範囲確認調査」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集』豊橋市教育委員会 1982

註7 木下克己 「浪ノ上地区遺跡所在調査の結果報告について」1980

註8 三菱レイヨン株式会社送水管施設移設工事に伴う発掘調査については、小畑頼孝氏、森田勝三氏からご教示を受けた。詳細については付載1を参照されたい。

註9 故木下克己氏の資料や発掘関係者の話から、昭和54年9月から昭和55（1980）年3月までの浪ノ上地区遺跡所在調査の結果、A地区、B地区、C地区のうち木下B地区、木下C地区はこの時点ですでに削平されていた。

第2節 第1次調査

区画整理区域は東西約680m、南北約380mで鳥が両翼を広げた形をしている。昭和54（1979）年の遺跡範囲確認調査（註1）の木下B地区、木下C地区はすでに削平されていたので発掘調査は木下A地区のみとなった。

A区は450㎡で、区画整理区域内の北側台地縁端部に位置し、現状は畑であった。遺跡範囲確認調査の木下A地区内第8地区にあたる。また、三菱レイヨン株式会社送水管施設移設工事に伴う発掘調査区域の北側に隣接した区域である。

発掘調査期間は昭和56（1981）年5月31日から6月30日までの31日間を要した。

5月31日は杭打ちをしてグリッドを設定した。東西をX軸として3mごとに区切って番号で表し、南北をY軸として3mごとに区切ってアルファベットで表してグリッドを設けて調査を進めた。発掘作業は6月1日から始めたが、当初は調査員の小畑頼孝一人で作業を進めた。発掘調査期間が短いためパワーショベルやブルドーザーで掘り上げた土を除去した。そこで浪ノ上区画整理組合に作業員の派遣を依頼するとともに市民文化課にも協力を要請した。6月3日からは作業員と市民文化課の職員との協力を得て作業を進めることができた。6月7日は日曜日だったので久永春男氏（日本考古学協会会員）、牧野彦一氏（日本考古学協会会員）のご指導をいただき、また、浪ノ上区画整理組合の金仙

宗樹理事長、篠田進副理事長の来訪があった。山尾秀則部長以下15名の愛知大学考古学研究会会員の応援があり作業がはかどった。調査区北側で方形周溝墓が検出された。台地の縁端部にあたり、北側部分はすでに崩落していたが、主体部は残存していた。西の周溝からはほぼ完形に近い壺と高杯の破片が出土した。さっそく1号方形周溝墓（A-SZ1）と命名された。6月11日、1号方形周溝墓の南側で、2号方形周溝墓（A-SZ2）が発見された。6月15日、さらに2号方形周溝墓の西側から3号方形周溝墓（A-SZ3）が発見された。期限内に発掘調査が完了できるよう午後6時まで作業時間を延長した。その後、2基の方形周溝墓と2軒の堅穴住居址、22基の土壇を検出し、6月30日、組合が指定した通り発掘調査を終了した。なお、この調査に当たった者は、次の通りである。

調査担当者 住吉政浩 調査員 小畑頼孝

愛知大学考古学研究会 岡田学、神谷公子、杏名信光、坂本秀幸、加藤千尋、鈴木途修、坂田美代子、

都築伸也、杉山弘道、内藤浩二、平川啓子、山本久代、山田恭子、山尾秀則

桜丘高等学校考古学研究会 伊海徹、伊沢則幸、加藤拓也、河辺勉、手島隆、長坂和彦、成瀬康宏、

伊石安司、山崎則夫

地元作業員 石井汀、佐野則夫、篠田すみ子、杉浦義弘、鈴木逸、鈴木健、坪野邦雄、古田卓次、松

沢義明、矢野一

豊橋市教育委員会市民文化課 安藤明雄、市川嘉彦、伊奈利定、大野俊始、河合洋直、後藤清司

指導・協力 斎藤嘉彦、芳賀陽、伊藤恵、森田勝三、片山洋、竹内尚武、野沢則幸、戸田守彦、村松久



挿図第21 A区の発掘状況と新聞報道

第3節 第2次調査

第2次調査は、B区とC区で行われた。

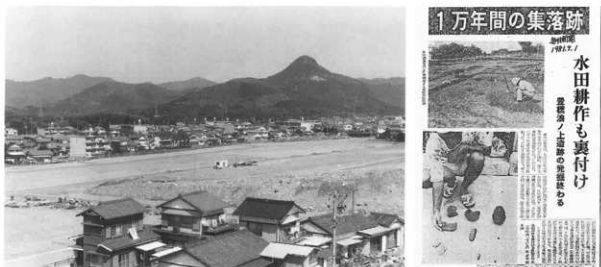
B区は、昭和55（1980）年の遺跡範囲確認調査（註1）では木下A地区内第9地区にあたり、第1次調査（A区）の南に位置する。東西約50m、南北約70mの範囲内の面積約2,000㎡である。台地上で、現状は雑草の生い茂った草生地であった。

C区は、昭和55（1980）年の遺跡範囲確認調査では木下A地区内第6地区にあたり、第2次調査（B区）の西に位置する。東西約60m、南北約35mの範囲内の面積約1,500㎡である。現状は雑草の生い茂った草生地であった。

B区、C区は並行して調査を行った。期間は、昭和56（1981）年7月24日から9月7日までの46日間を要した。

両地区は、草生地であったのでブルドーザーにより、黒色有機土上面まで削平した。ブルドーザーのキャタピラが10cmほど地面に食い込むので、調査担当者が重機のそばにいて指示をしながら作業を進めた。途中パワーショベルで削平したが、ショベルの爪があるためきれいに削平できないことに気づいた。オペレーターの金沢さんから爪なしショベル使用の提案があった。そこで大林組の担当者に爪なしショベルを依頼したところ、快く手配してくれた。爪なしショベルで削平したところ黒色有機土の広がりわかり、遺構の存在が確認しやすくなった。7月26日にはB区の表土削平を完了し、C区の削平にかかった。

7月29日、天気快晴。地面は干上がり乾燥して固く締まっていたため、バケツで水を撒きながら作業を進めた。8月2日からは作業員3名が来てくれた。地元作業員の坪野さんと松沢さんに水汲みポンプを手配してもらった。また、牟呂用水水利組合へ牟呂用水の水を使用させて欲しい旨連絡した。係員2名が現地と水汲みポンプを確認した上で許可してくれた。これによって、遺構も確認しやすく



挿図第22 削平された木下B地区・木下C地区（右手遠方石巻山）と新聞報道

なり、作業の能率が上がった。8月11日までにB区では11軒の竪穴住居址を検出することができた。9月3日B区、C区ともに区域内の遺構を精査した。その後、図面を作成し、写真撮影をして予定通り9月7日には完了した。B区では、竪穴住居址を23軒、土塙を17基、C区では竪穴住居址を22軒、土塙を6基検出した。なお、この調査に当たった者は次の通りである。

調査担当者 住吉政浩 調査員 伊藤恵、小畑頼孝

愛知大学考古学研究会 山尾秀則、鈴木途修、坂本英幸、岡田学、神谷公子、坂田美代子、山田恭子、三須信二、石元晃一、都築伸也、荻名信光、加藤恭一、都築久美子

桜丘高等学校考古学研究会 山崎則夫、伊沢則幸、河辺勉、加藤拓也、孕石安司、手島隆、長坂和彦、成瀬康宏、伊海徹

地元作業員 古田卓次、鈴木健、坪野邦雄、鈴木逸、矢野完一、松沢善明、佐野里美、石井汀、杉浦義弘、佐野則夫、篠田すみ子、戸田松助、天野とし子、篠田和代

豊橋市教育委員会市民文化課 後藤清司、大野俊始

指導・協力 久永春男、芳賀陽、牧野彦一、斎藤嘉彦、加藤稔、大浦純造、大河正男、谷悟、戸田守彦、村松久、森田勝三、伊藤厚史

第4節 第3次調査

昭和56（1981）年9月19日、美術博物館において浪ノ上東部土地区画整理に伴う発掘調査の打ち合わせが行われた。出席者は、市民文化課から白井課長、大木係長、後藤清司、豊橋遺跡調査会から芳賀陽、伊藤恵、住吉政浩、小畑頼孝である。

会では、第1次と第2次の発掘調査の成果と問題点が話し合われた。問題点は、検出された住居址



挿図第23 作業終了後の学習会風景

や方形周溝墓、土壌の数に比して発掘調査期間が短く十分な調査ができなかったこと、発掘調査費の不足があげられた。調査員、作業員の不足は教育委員会市民文化課の応援に頼ってきたがそれも限界であるとのことであった。

昭和57(1982)年2月1日、区画整理組合事務所において、昭和57年度の工事計画と発掘調査についての話し合いが行われた。出席者は、浪ノ上東部土地区画整理組合の篠田進、戸田美代吉、市民文化課から白井課長、大木係長、豊橋遺跡調査会から芳賀陽、伊藤憲、住吉政浩、小畑頼孝である。篠田氏から、区画整理に伴う工事が計画通り進められるよう発掘調査してもらいたいとの要望が出された。2月2日、3日に今後の調査予定地にある墓地の改葬を行うとの連絡を受けた。翌日、墓地改葬に小畑頼孝が立ち会った。爪なしショベルで表土を剥いで黒色有機土を確認したところ黒色土の平面形はすべて長方形をしており、土壌墓は66ヶ所確認された。正円寺住職の話では、明治、大正、昭和に埋葬されたものである。その他の遺構は、検出されなかった。

昭和57(1982)年2月末、筆者は昭和57年度の区画整理工事に伴う発掘調査と稲荷山1号墳の保存について豊橋遺跡調査会で作成した要望書を浪ノ上東部土地区画整理組合理事長金仙宗樹氏に届けた。また、同じものを教育委員会教育長村田義雄氏にも届け、善処を依頼した。

昭和57(1982)年3月初め、教育委員会市民文化課の立会いのもとに浪ノ上東部土地区画整理組合理事長金仙宗樹氏と豊橋遺跡調査会代表芳賀陽氏との間で埋蔵文化財発掘委託契約書が締結された。

第3次の調査区はD区で、D区は、B区、C区、浪ノ上1号墳に囲まれた台地の縁端部にある。昭和55(1980)年の遺跡範囲確認調査の木下A地区内第2地区にあたる。東西約85m、南北約25mの範囲内の面積約1,000㎡である。現状は雑木林や竹林であった。

調査は、昭和57(1982)年3月24日から4月10日までの18日間を要した。発掘を進めているとD区内の浪ノ上1号墳の墳丘裾の表土を重機で削平している工事が目に入った。土砂を運搬するための仮設道路を作っているとのことであった。浪ノ上1号墳の周溝部分に当たる可能性があるため、工事の中止を依頼した。次の日、現地へ浪ノ上東部土地区画整理組合、大林組、豊橋市区画整理課、教育委



挿図第24 加藤氏宅北側D区の調査状況と新聞報道

員会市民文化課、豊橋遺跡調査会の5者が集まり、現場で協議して仮設道路の位置を変更した。

仮設道路建設を早めるため、発掘調査箇所を北側台地縁端部に集中した。立木の伐採後、等高線測量をした。3月25日、26日で測量を終えた。3月26日の午後から爪なしショベルで表土剥ぎを行った。3月27日、堅穴住居址D-SB4からは、北壁に接して直径10cmほどのピットが6個半円形にならぶ竈址が検出された。ピットの内側は焼き締まって赤褐色をしていた。堅穴住居址内からS字甕や甎の破片を検出した。堅穴住居址D-SB2、D-SB5、D-SB6の切り合いに伴う新古の問題、堅穴住居址D-SB4、D-SB8、D-SB6の切り合いなどがあり、細心の注意を払って調査を進めた。4月9日、区画整理組合から4月10日に現地説明会を行うよう依頼された。報道関係者には連絡してあるとのことであった。遺構の精査と写真撮影を大至急行った。4月10日、D区の遺物の取り上げと遺構の最終確認をして作業を終了した。D区のできなかった箇所は第4次調査で行うことにした。この調査に当たった者は、次の通りである。

調査担当者 住吉政浩 調査員 伊藤恵、小畑頼孝

愛知大学考古学研究会 大竹良子、岡田学、加藤千尋、神谷公子、川崎信一、小栢隆、小林雅博、坂田美代子、田尻文代、都築久美子、富永欽吾、原田直治、三須信二

協力 伊海徹、伊藤厚史、長坂和彦、山崎則夫

第5節 第4次調査

昭和57（1982）年5月20日、昭和57年度の区画整理事業の計画とそれに伴う発掘調査についての話し合いがもたれた。出席者は浪ノ上区画整理組合、工事関係者、教育委員会市民文化課、区画整理課、豊橋遺跡調査会のそれぞれの代表者である。話し合いの後、現地で確認をした。

さわらび荘の東側にある「かにあら」の沢を埋め立てるための擁壁（ようへき）工事が行われていた。小さな侵食谷には水田址がある可能性も考えられた。5月22日、幅1m、長さ2mのトレンチを



押図第25 正円寺墓地。調査前の状況（左）と検出した土墳墓（右）

入れ地層の堆積から水田址の存在を確認した。3箇所にトレンチを入れ、パワーショベルで掘削した。結果、第1層は表土層で厚さ20cm、第2層は径1～2cm大の角ばった小石を多量に含む砂利層で厚さ20～25cm、第3層は青灰色シルト層で厚さ20cm、第4層は小礫混じりの砂層で厚さ10cm、第5層は青灰色シルト層で厚さ10～15cmであった。第5層から平安朝瓷器の小片一つが検出された。第6層以降は小礫混じりの砂層、青灰色シルト層の繰り返しであった。

青灰色シルト層は、水田に利用された地層とも考えられるが、断定はできなかった。

同年7月10日、市民文化課から「当初の保存予定地内では稲荷山1号墳が入りきらない恐れがあるので大至急確認して欲しい」との連絡を受けた。豊橋遺跡調査会の芳賀陽と小畑頼孝が立ち会って確認作業を行った。稲荷山1号墳の周辺の表土を削平したところ黒色有機土層が確認された。黒色有機土層は直角に折れ曲がって直線状に伸びていることが判明し、稲荷山1号墳は方墳と考えられる。周溝の広がり方が確認できたので浪ノ上区画整理組合の篠田進氏に連絡を取り、周溝の範囲までを公園の敷地とするよう、計画の変更を依頼した。篠田進氏はすぐに、計画の変更を県に申請し許可された。

愛知大学考古学研究会の会員は神ヶ谷住民会館へ宿泊して発掘調査に参加することになった。7月20日にオリエンテーリングを行った。小畑頼孝が今までの調査結果のプリントをもとに説明した。スライドは曾根英臣（吉田方小教諭）がまとめたものと桜丘高校考古学研究会が作成したものを利用した。終了後の質疑応答の時間には熱心な質問が出された。午後7時から9時過ぎまで行われた。

第4次調査はD区に残りとE区、F区、浪ノ上1号墳、稲荷山2号墳を対象に行った。調査区は区画整理区域内の西側台地一帯に位置している。東西約210m、南北約60mの範囲内の面積約3500㎡である。昭和55（1980）年の遺跡範囲確認調査の木下A地区内第1地区にあたる。現状は山林や草生地であった。作業は住居址班と古墳班の二つのグループを作り、同時並行で進めることにした。住居址班を住吉政浩、古墳班を伊藤恵が担当することにした。



挿図第26 第4次D区の調査風景と新聞報道

1、住居址班

7月21日から愛知大学考古学研究会の会員が調査に加わった。住居址班では二人一組で遺構の調査を担当した。一日の作業の終了時には全員集合して学習会を行い、発掘調査日誌を書き、提出するようにした。

7月30日までにD区では竪穴住居址11軒、土壙13基、土壙墓1基、溝状遺構2箇所を検出した。E区では竪穴住居址10軒、土壙墓33基、方形周溝墓1基を検出した。8月2日、E区の台地縁端部で縄文早期の押型文土器片を6点検出した。精査していくと直径5～20cmの円礫が大量にある石組み遺構が出土した。この円礫の石を測図しながら作業を進めたところ下層から灰まじりの暗灰褐色土が検出された。それを除去したところ楕円形をした竪穴住居址（E-SB19）が検出された。柱穴群や石組み遺構、竪穴住居址、土壙から前述のように押型文土器片が検出されたが、また石斧と石錘、剥片石器などの石器も見つかった。このことから、楕円形をした竪穴住居址、柱穴群や石柱組み遺構は、縄文早期の押型文土器に比定される遺構であった。これらの遺構は台地の縁端部にあり、東から西に緩やかに傾斜をした斜面に立地していることが確認できた。

8月10日、E区の遺構検出と並行して、F区の表土剥ぎを始めた。厚さ15～30cmの表土を削平すると黒色土の広がり確認できた。しかし、今まで調査してきたE区西側が工事に入った。その時の愛知大学考古学研究会会員の日誌を紹介する。「本日まで20日間もかけてやってきた場所がブルドーザーでいとも簡単に壊されてしまうのは何とも空しい。（富永欽吾）」、「E区が削られあとかたもなくなりました。とても残念に思う。豊橋の数少ない縄文時代の遺構がなくなるなんて淋しい。（中村久視子）」、「本日まで一生懸命やってきた遺跡が一瞬のうちにブルドーザーで削りとられてしまった。古墳の上から眺めるとあわれで空しい。人々が考古学について理解を深めてくれる日が来ることを願う。（池田素康）」



挿図第27 E区の調査状況

学考古学研究会の加藤恭一、都築清泰、杓名信光、鈴木途修、岡田学、深津秀典、二宮久美子、田尻文代、加藤千尋、永田ひろみ、大竹良子である。

7月21日から7月末までは、天候不順により調査が遅れたが、昭和25（1950）年に、地元さぎなみ会により発掘調査された浪ノ上1号墳の第1住居地の床面精査を行い、8月上旬には、旧中央トレンチの清掃、新トレンチの設定と周溝の調査が実施された。封土中からA七土とB土を検出することができ、8月下旬には、封土下の第2住居地の発掘調査を行った。

8月17日からは、稲荷山2号墳の調査にかかり、浪ノ上1号墳の周溝、土壌等の実測と並行することになった。8月20日より周溝やトレンチの実測図をとった。封土中に2基の土壌があらわれ、封土下には、2軒の竪穴式住居址を発掘し、9月3日、すべての実測作業を終了させた。

この調査に当たった者は、次の通りである。

調査担当者 伊藤恵

愛知大学考古学研究会 加藤恭一、角田稔、都築清泰、石黒弥生、二宮久美子、田尻文代、加藤千尋、永田ひろみ、大竹良子、中村久祝子、武田光志、原田直治、川崎信一、鍋柄利江子、松元清、丸山哲夫

桜丘高等学校考古学研究会 孕石安司、牧平恭秀、白井秀明、佐竹一郎

豊橋市教育委員会市民文化課 金子喜彦、市川嘉彦、後藤清司、白井泰人、安藤明雄

地元作業員 松沢文子、杉浦郁子、戸田よしの、篠田すみ子、岡田豊子、佐野里美、矢野とし子

協力 長坂和彦、伊海徹



挿図第29 稲荷山2号墳の調査状況

埋蔵文化財の宝庫調査へ

区画整理の前に

縄文早期竪穴住居も
磨製石斧などと共に

初期で
磨製石斧などと共に

区画整理で消滅へ

縄文早期竪穴住居も
磨製石斧などと共に

区画整理で消滅へ

古代の一大住居群落



区画整理で消滅へ

縄文早期竪穴住居も
磨製石斧などと共に

区画整理で消滅へ

東三河最大の方形周溝墓

浪ノ上遺跡で、確認

発掘調査、土器類も多

伊勢からハスの葉出る

古代国家の「大集落」

三次まで、66戸確認

浪の上遺跡

公園用地に取りこみ

既定の計画を変更

浪ノ上周辺の遺跡調査、三月

きょう現場で説明会

方形周溝墓などわかる

稲荷山古墳保存へ



浪ノ上周辺の遺跡調査、三月

きょう現場で説明会

方形周溝墓などわかる

挿図第30 発掘調査を伝える新聞報道

8月21日 4t梯子車（スカイマスター）を使って、浪ノ上1号墳と住居址の写真を上空から撮影した。また、8月31日には、現地説明会を行った。住居址班は愛知大学考古学研究会の岡田学氏と古墳班では加藤恭一氏が説明を行った。現地説明会には30名ほどの参加者があった。参加者の一人郷土史家の石川一美氏から現地において貴重なご教示を受けた。

第1次調査から第4次調査に至るまでの2年間、道具の保管から水の手配、時には薬の手配に至るまで、ご配慮いただいた加藤正司さん、浪ノ上区画整理組合の篠田進さんを初め作業に参加して下さった皆さん、重機等手配だけでなく掘削や削平にご協力をいただいた大林組の皆さん、2年間もの長きにわたり応援いただいた牛川の皆さんに感謝申し上げます。

註1 木下克己氏が豊橋市教育委員会教育長に提出した報告は「浪ノ上地区遺跡所在調査の結果報告」となっていたが、昭和57（1982）年3月に発行された『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集』では、「浪ノ上遺跡範囲確認調査」になっているので、以後は範囲確認調査として呼称する。

註2 E区の土壌墓から検出された人骨は、大阪市立大学大学院医学研究科に委託してある。



押図第31 現地説明会と新聞報道